闌更の句十句

曉臺の句を解した序でに、今度は、曉臺に次いで「花の本」になつた闌更の句を解して見よう、この人は蕪村、曉臺あたりの中興の風潮の感化を幾分か受けてゐたので、その句風に於いても隨分見るべきものもあるが、また、文政天保に接する過渡期に立つただけに、往々にして俗趣味に墮しはせずやと思はれる句もある。けれども、まだ〳〵此處いらまでは、天明の餘響を受けた趣味を知る作者といふべきであらう。

▲正月も三日過ぐれば人ふるし

正月といへば、何事も改まつて、心も浮々として目出度い〳〵と壽きつゝあるが、はや元日が二日となり、二日が三日となり、更に三日も過ぎて了へば、右樣に祝ひ壽いた人の心も幾分か常に復して來て、新らしい周圍の光景もやゝ見飽きる所より、其の吾れ人を打ち見ても、はや古びたやうな感じがするといふので。

よく人情を歌つてはゐるが、少し穿ちといふ所に踏み入つてゐるを免れぬ。こゝが此の人の曉臺よりも多少俗に傾いた點と思ふ。

▲元日やこの心にて世にゐたし

元日は人の心も改まりて、少しも汚れたり曲つたりする考は起さぬ。すべてが純正なる心を持つてゐるから、いつも此の心を以て世にゐたいもの

である。さすれば人間の社會は極めて平和で、己れも何の苦しみもなく渡り行くであらうといふので。

こゝに至るともはや一種の人生觀ともいふ所に渉つて、俳諧趣味といふものは殆ど見ることが出來ぬ。純然たる月並調である。

▲紙漉きの手許に散るや春の雪

其處に紙を漉いてゐる人がある。其の手許に、折節春の雪がちら〳〵と降りかゝつてゐるといふので、品物が紙であつて何處かに趣を持つ所へ雪のちらつく樣はいかにも書趣がある。又、紙を漉くのは隨分冷たいことを忍ぶのであるに、そこへ更に雪が散るといふので、一層苦しさも思ひやられる。この情と景とを合せた所に、一種の詩的趣味が構成されたので、

これらは先づ曉臺あたりと共に中興を歌ひ得たがはの句といつてよからう。

▲糸遊のみだれ〳〵て靜かなり

處は野邊でもあらうか、糸遊が立つてゐる、それが亂れ〳〵てゐるが、いかにも靜かな、何等の騷々しき趣もないといふので。

自然に春の長閑な景色が歌はれてあつて、これなども聊かの俗的な傾きを持つてゐない。

▲藪入の二人となつて來りけり

これは女と見える。それが親里へ來た所であるが、已に子を生んだので、

その子と共に二人となつて來たといふので、父母のそれを嬉しく思ふ所から娘親子のそれに對する樣なども聯想に浮んで、人事の叙寫としてはよく歌はれてゐるけれども、「二人となつて」などといふ言葉は、あまりに氣が利き過ぎて、他日月並的の穿ちの祖を開いてゐるのである。

▲春の水清少納言跨ぎけり

其處に春の水が流れてゐる所へ女が來た。それば清少納言であつたが、幸ひ其の水の巾も餘りに廣くなかつたと見えて跨ぎ越した。それが可笑しかつたといふのである。

春の水は優しいもの。又、女も、殊に宮女のごときものは優しいものである。それが跨いで越したといふと、姫御前のあられもないといふ感がある。こゝが一つの趣きで、一方に、春の花見などの野山の景色で女連れの遊びつゝある樣も現はされるし、また、その女が幾分か俠な風の人間であることも見える。

尤も、此處では昔の樣といふよりは寧ろ現在目擊した所を歌つたのであらうが、其處へ昔の清少納言を假りた所に一つの手段がある。この人は紫式部などとは違つて、男まさりで元氣を現はした人であるから、たまたま此の取合せにも適ふ譯である。これらは後の月並家などには思ひも依らぬ趣向で、さすがは閑更の面目を保つた何ともいはれる。

▲鎌倉の世にも劣らず初鰹

初鰹は毎年鎌倉から江戸に送られて、全都の賞翫を得て非常な勢ひの

ものである。で、今振返つて見るに、鎌倉は昔、源家、北條家が覇を唱へて居つた時は中々盛んであつたが、物變り星移つて今の其の地は衰頽を極めてゐる、それだのに、その昔の世にも劣らぬのは初鰹のみであるといふので。

古今を通觀して一の感慨を歌つたのであるが、「世にも劣らず」といふごとき言葉はやゝ通俗的に傾いて、誰にも成程と合點せしめるだけそれだけ、月並に消息を通じてゐる點が見える。

▲冷飯に秋立つ獨りずまひ哉

侘びたる獨り者の趣である。今しも飯を食ふが、それが冷飯で、其の冷えを感じる所より、今日は秋立つ日であると氣付いたといふのである。

冷飯と無頓着に欹ひ出した所などは、先づ以て墮落の傾向もないやうである。

▲關の戸やあられたばしる膝の上

これは關守即ち關所の番人の樣である。

今、番所に坐つてゐると、折しも霰が降り來つて、端近なので膝の上にもたばしつたといふので。或る小役人の一面には嚴めしく頑張つて居れども、一面には寒く身も凍えて侘しい所を歌つたものである。

これには何處かに蕪村などの弄んだ磊落趣味が仄かに見えてゐる。

▲冬ごもり焚火に曇る眼鏡哉

これも侘び人と見えて、冬ごもりして榾など焚いて其の火に當つてゐる。その日々の埃で懸けてゐる眼鏡が曇つて物見ることが出來ず、度々拭はねばならぬやうになる。

もとより雅樸な人間を描いてはゐるが、焚火に曇るなどゝいふは氣が利いた言ひ方であつて、位地が位地だけに、これらが先づ闌更の俳句生涯を兩面とも現はしたものといつてよからう。

一茶の句十句

蕪村、曉臺等と同じ時代に出でゝ、中興の俳風に與つて力あつた人に加舍白雄といふ人がある。前回の續きからいふと、今度はこの人の句を解す

べきであるが、さう〳〵同じ色合の句をのみ解するも興なき業であるから、今回は一つ一足飛びに飛んで、寛政度の俳人中、他と異つた一生面を開いた小林一茶の句を解することゝしよう。

この人は幼年の時分から繼母の手にかゝつて、餘りに苦しめられる所より、父も見兼ねたが、また妻に憚かる所もあつて、表は脱走の姿にして、内々聊かの金を與へて江戸へ遣はしたといふことである。で、江戸で或る商人の小僧となつてゐるうち、何時の間にか滑稽趣味の俳句を唱へて、だんだん人にも知られることゝなつた。

其の後幾年かを經て歸郷した時に、自分の家に屬する租税をば、不在中にも納めねばならぬことゝなつたので、他の納税者との權衡を得ぬといつて、當時の役人に其の不公平を訴へたことがある。われも昨年彼の產地た

る長野に遊んだ時に、其の文面を見たことがあるが、それがいかにも洒落で、又一面には横着な口上を使つてある所を見ると、洒落生涯な中にも亦氣骨があつて、權貴を憚らぬといふ樣も見えてゐる。

そして此の人は、種々なる艱苦を經たせいか、四十以後に初めて妻帶したが、其の始めて生れた子を失つたので、非常に悲んだ樣も見えるし、なほ又不幸にして妻も三度ばかり變つてゐる。それについては、一面には多情なといふやうな事も往々傳へられてゐて、右等の書簡とか自記の日記とかいふものも鄕里の長野には今以て殘つてゐる。

で、今は此の人の斷簡零紙も非常に珍重されて、昨年長野に共進會のあつた折などは、其れらのものゝみの展覽會が開かれたのを見ても、或る一種の人物として鄕人に尊重せられてゐることが分る。

さて、いよ〳〵其の句を解することゝするが、人口に膾炙してゐるのは、

▲目出度さも中位なりおらが春

これは江戸に在つた頃の句でもあらうか、すべてが江戸言葉で成り立つてゐる。今、あら玉の春に逢つたが、われはまだ貧乏でもあるし、目的も果して居らぬ。けれども、何かまだ望みのないこともないのであるから、いはゞ先づ、目出度さも上でもなければ下でもない、中位の所である。そこが、おらが春の實境であるといつたので。

「おら」といふは自己の稱で、江戸の下流社會の言葉であるし、又、「中位」などゝいふのも江戸人の使ふ言葉であつて、すべてが下卑てゐる。けれど

も、それを、思ひ切つて無頓着に使つた所に一種の雅致を生じて、作者の洒落な生涯も却つて現はされてゐる。

序でにいふが今日の初心の俳人などが、やゝもすれば「おらが何々」などと使つて、それで喃れ洒落な句を歌つたと心得てゐるが、かやうな言葉は度々使へば何等の興味もないことになる。一茶の如き人が、たまたまこの句の如き場合に歌つてこそ始めて興あれ、他の人が同じことを繰返すのは寧ろ其の拙を現はすやうなものである。

▲霞みけり憎い宿屋もあとの村

これは春の旅路の樣である。

或る驛へ着いて宿を請うたに許して呉れぬので、餘儀なく其處を立ち出

で、少し隔たつてから振り返つて見れば、折しも春のことだから、霞が立つてゐて、今しも宿を斷られて憎いと思つた其の宿屋も、霞を隔てた後の村となつて了つて、何處かに一つの眺めある畫の中に入つたわいといふのである。

「憎い宿屋」といふは下卑た言葉であるが、それを霞みの眺めに入れて、忽ち懷しくなつたと歌ふ所に、面白い雅致が認められるのである。

▲門前や杖でつくりし雪解川

久しく降つた雪がだん〳〵と解けて、其處此處に水が溜つてゐる。其處が門前であつたから、通路の爲めに杖を以て其の雪を掻き分けた。すると、其の筋へ水が流れて行く。それを雪解川といつて、これはわが杖で作つた

ものだと云ひなしたのである。なんでもない出來事をちょッと面白く歌つたので、作者の氣輕な境界も自然に現はれてゐる。

▲年寄と見てや鳴く蚊も耳の側

今、蚊が耳許へ來て鳴く。わが年寄り故に遠く離れては聞えまいと思つて、かくまで傍へ來て鳴くことであるか、年寄は蚊にも餘計の煩ひを受けることであるといつたので。

蚊には何の心もないが、それをかく言ひなして、蚊に煩ふ中にも何處かに可笑しく戯れた所に、俳人の餘裕ある境が歌はれてゐる。

▲投げ出した足の先なり雲の峰

夏のことで、縁端へ足を投げ出した。其の先きは廣い野原か、それとも山の出鼻などであつたか、兎に角直ぐ向ふに雲の峰が立つてゐたので、それを足の先きにあるといつたのである。

いかにも放膽的に言ひ放して、周圍の趣も廣々と大きくなつたと共に、自己の身體も打ち寛いで、さも涼しげに打ち臥した所が想像される。

▲姨捨はあれに候と案山子哉

姨捨は信州の名所で、一茶の郷里とも餘り遠からぬ所である。其の傍らは例の田毎で案山子が立てゐる。その案山子と姨捨との關係を見た所が、丁度知らぬ旅人などに、名所の山はあれに候と指さしてゐるやうに見えたといふので。

無心なものを可笑しく看做して、なほそれに、「あれに候」と能か狂言のごとき言葉を用ゐたので、下卑ずに一つの興を歌つてゐる。

▲名月を取て吳れろと泣く子哉

名月の明るい鏡みたやうなのを見て、あれが欲しい、取つて欲しいと泣く子があるといふので。

強ちかくいつたのではないとしても、子供に對しては、さもかやうなことがあらうといふ所に、いよ〳〵空に名月の明らかに懸つてゐる樣が思ひやられる。「吳れろ」と俗な言葉を使つたので、一層その趣が眼前に躍り出るやうである。

▲祐成が蒲團引きはぐ笑ひ哉

所は大磯の里で、曾我十郎祐成が昨夜より泊り込んで、朝になつてもまだ蒲團を被つて寐てゐる。相方の虎はすでに起き出でたが、いつまでも祐成が起きぬので、態とつれ無く着てゐた蒲團を引ぱぐと、祐成も驚いて目を覺まして、互ひに打ち笑つたといふので。

無頓着に可笑しい所に一種の戀愛的情味も含まれてゐる。定めて、昔、曾我物語時代にあつたらうと、詩人の想像を歌つたものである。

▲十日程置いて一日小春哉

十月の頃で、すでに寒氣もだん〳〵催して、毎日々々霜も置き、凩も吹

きすさんでゐるが、それが十日ばかり立つと一日は穏かなよい日和、即ち小春日和になる。で先づ少しは助かつたと人が感じるといふのである。

これも無造作に言ひなして、いかにも其の時候の趣がよく歌はれてゐる。

▲朝晴れにばち〳〵炭の機嫌哉

冬の朝、起き出でゝ障子などを開ける。折しもよく晴れてゐたが、其處の火鉢か何かにあつた炭火がばち〳〵とはねて音をさせたといふので。それが丁度この珍らしいよい天氣を炭も喜んだと見えて、よくはねるのは御機嫌のよい爲めであるといつたのである。

實は作者がこの朝を心地よく思つた所を、炭のはねるのに事よせて歌つ

たのであらう。

大江丸の句十句

前回に一茶の句を解したから、今回はその滑稽趣味の關係から大江丸の句を解して見よう、この人は一茶よりは少し先輩で、滑稽も一茶ほどに極端ではないが、他の俳人に比すると一種の特色がある。或は一茶などは此の人に幾分私淑する所があつたかも知れぬ。

▲七草や親の拍子にかしこまり

正月七日の朝、早くより起きて、主人たる人が七草を自ら叩いてゐる。

その音を、息子か娘かゞ聞きつゝある心持を歌つたのだ。一體七草をはやすのは、拍子を以てはやすのであるから、それを聞いて、それが親の叩くのであるといふ所より、畏まつて耳を欹てゝゐるといふのである。

表面はいかにも眞面目らしいが、この「かしこまり」といふ所に滑稽がある。中々に親爺も巧くはやすわいと感じる所、又、親爺が新玉の春ぢやといつて浮れてゐる樣などにも聊か可笑しい所もあるが、親に對しては何處までも畏まりつゝあるといつたので。殊に男子などであれば、少し起き遲れて、床の中で其の拍子を聞いて、畏まつて、はや親爺は起きて、七草のことにも及んでゐると、少々面目ない困つたといふ意味もあるかも知れぬ。

兎に角、若い子が親に對するこの正月の祝ひ日の趣を叙した所に、一種

の滑稽を認めるのである。

▲戀ひ〳〵て猫のおなかや春の月

これは猫の戀で、騷がしき叫びの戀の日もはや過ぎ去つて、牝猫は孕んで腹も少し大きくなつた。折しも春の月の照らす頃であるといつたので。春の月影に猫の腹の膨れてゐるのを見た可笑味を叙べたのである。

なほはるといふことばが、上下にかゝつて居るし、又おなかと俗語を使つた所が、他日の一茶を開いたさまが見える。

▲なほ見たし花の夕の月の顏

月は何時見ても床しいものであるが、櫻花咲く夕の其の顏はなほ更ら見

たいものである。いかに美しく床しいことであらうかといふので。

これだけならば餘りに平凡な着想であるが、これは芭蕉翁が、

なほ見たし花に明け行く神の顏

と歌つて、かの葛城の神の顏が醜いといふ所から、それと花との對照がいかに醜からうといつた反對に、月の顏は常に美しい、その美くしい月と美しい花との對照は、更に一入の眺めがあらうと、翁と反對に着想を附けた。これが所謂飜案なるもので、この關係を知つてこの句を讀むと、一種の歴史的趣味を起すのである。

今日は此の樣な趣味を弄ぶものが少くなつたやうだが、われはやはり此のあたりの趣向も、ます〳〵開ける文學としては存じて置きたいと思ふ。

▲夕涼み地藏こかして逃げにけり

村里か何かで夕涼みをしてゐる。其處は道端で、地藏菩薩が一つ立つてござつたのを、力自慢か何かして其奴を倒した。そこへ村の親爺などが出懸けて來たので、叱られてはならぬと逃げ去つたといふので。少年の無邪氣な惡戯をしてゐる所に、何處か夏の夕の涼しさも思ひやられて、且つ頗る可笑しい。

▲丸裸これほど暑きことはなし

三伏などの日で、すべて衣類を脱いで丸裸になつてゐる。まだそれでも堪へ難いといふ心持を歌つたので。これほど暑きことはなしとは、其の丸

裸になつた人自身の感じか、又他より見て吐いた言語でもあらうか、兎に角十七字の叙寫が何處までも磊落で、やはり丸裸的に歌はれた處が一種の洒脫なる感を人に與へる。

▲芋賣りや月に別れし秋の聲

芋賣りといふのは、江戸では餘り見なかつたと思ふが、京、大阪あたりには、夜、江戸とは少し違つた燒芋を賣り歩いたもので、われなども曾て接したことがある。この作者は大阪人であるからそれらの商人の賣聲を聞いた時の句でもあるかと思はれる。

此の芋を賣るのは秋もやゝ老いて、冬に近づく時であるから、人に持て囃された十五夜の月も、もはやだん〳〵と細り行いて、周圍の景色も人の

心も淋しく心細く思はれるといふことを、その芋賣る聲に託して、それが秋めいて、侘しく悲しげに歌はるゝやうであるといつたのである。

これらは一面はやゝ眞面目なれど、芋賣りの聲にそれを現はすといふは、やはり滑稽的手段を離れて居らぬ。

▲七夕の今宵大星力彌かな

この句の意味は隨分多方面に解されるやうであるが、兎に角七夕は星逢の夕である所から、其の星から芝居の大星力彌といふへかけ、又星逢のあふから大星とかけて、その力彌——まだ十五歳の美少年である力彌と許嫁の小浪の戀などに思ひ合せ、それを二つ星の情にも通はせたものであらう。

或はまた、此の七夕の日に力彌が祇園の廓へ使に來たことゝ見ることも

出來る。

要するに、これは口合ひ的の手段を弄したもので、何處か芭蕉の正風以前の俳も現はれてゐるやうである。

▲清盛の文張つてある火桶哉

これには尼といふ題がある。

昔、清盛の愛妾の祇王及び佛の前が、遂に世を儚んで尼になつたことを思ひ合して、この尼の住居に火桶がある。侘しげな古めいたものであるが、それに張つてあるのは清盛より贈つた文殼ではあるまいか、いや文殼であると言ひ切つたのが一つの趣向で、主人は尼、それに對して暴威を振ひ、權勢を縱にした其の人の戀文の名殘があるといふのは、これも何處かに

可笑しな感じがある。

▲脫ぐまいと一町まはる頭巾哉

冬の日、外を歩いてゐると、向うから知つた人が來た。それも少しく丁重に挨拶をせねばならぬ人であるが、折しも寒さ凌ぎに頭巾を着てゐたので、それを脫いて挨拶するのも面倒だからと、忽ち横町へ外れて一町ばかり廻り道をしたといふので。勿論、今しも來るから、さあ廻らうとする時の感じのやうに思はれる。

これも其の來る人のあまり親しからず、逢つて話をするにも及ばぬ、いはゞ厭ふべき奴に出會つたといふ心持と、又一面には、禮儀作法の面倒臭いといふ横着者の狀態なども現はれて、何處までも滑稽趣味を存してゐる。

▲うか〳〵と白菊老いぬ霜の朝

已に冬となつて菊の花も老い萎んでゐる。霜の降つた朝、寒さの中に此の花を見たが、かつては美しいと弄ばれたものが、何時の間にかうか〳〵と老いさらばうて今の有様になつた。さてもあはれなことであると、これは草木を擬人的に詠んで、裏面に人も亦此くの如き境界があるのだと嘆じたのである。うか〳〵といふ言葉が此の句の特色をなしてゐる。

以上解いた所は、重に滑稽的の句であるが、此の外にまた、やゝ眞面目な歌ひ方をした句のないこともない、そこらは一茶の全集を擧て滑稽的なとは聊か違ふ所で、それがこの作者の彼と異なる點かとも思はれる。

要するに、大江丸の長所は、以上に擧げた如き滑稽的の方に多く存して

居るかと思ふ。

太祇の句十句

太祇は蕪村とほゞ同時代の人で、また別に一特色を備へた俳人であつた。かつて、子規の生前にも、蕪村を推尊したかたはら、この人の特色をも認めて、その句集を俳書堂から發兌せしめたことなどもある。極端なる滑稽の一茶などに比すれば、句風も多方面になつてゐるといつてよいが、しかし、その修辭上に於ては、多く俗語を用ゐて、洒脫に、また輕妙に言ひこなしてゐる。で、これらの點より見れば、やはり一茶、大江丸の續きには、自然この人に聯想を及ぼさねばならぬことになる。前々回に一茶を解き、前

回に大江丸を解いた因みから、今回は太祇の句を解くことゝする。

▲年玉や利かぬ藥の醫三代

昔は、一月に用ゐる屠蘇は、專ら出入の醫者から貰つたもので、即ちこれを逆にいへば、屠蘇はきまつて醫者のお年玉であつたといつて宜しい。で、この句は其處から趣向を立てたものかと思はれる。

今、年玉を貰つた。これは出入の醫者の贈物で、その人の調合した藥である。この醫者はすでに三代も續く家柄であるが、その藥といつては餘り効能がない。即ち利かぬ藥を下さるお醫者樣である、といふので。

これが屠蘇であつて見れば、强ち利く利かぬといつて論ずるでもないが、たま〳〵新歲に方つて一家病氣もなく、醫者から貰つたものは、目出度い

酒に投ずる屠蘇である。けれども、何等病氣には利き目はないと、醫者を嘲る如き言外に、一家の無事で目出度く春を祝ふ心持もほのめかされてゐる。

それから、茲に殊更に三代といつたのは、かの醫三世ならざればその藥を服せず、といふ漢土の諺から取つて來たこと勿論である。

▲永き日や目の疲れたる海の上

日永の時分に海岸に立つて、漫々とした沖を眺めてゐた。折しも春の長閑な空であるから、疊を敷いたやうな穩かな波が一面に動いてゐるのみで、外には何等格段なものも目に入らない。その穩かな春の海を、立つて眺めてゐたので、遂には目も疲れるやうになつたわいといふのである。

限りもない海を限りもなく眺めてゐるところに、自然に永き日の心持が浮んで來る。この句も「目の疲れたる」といふ一語は、どこまでも太祇の手段たるを失はない。

▲春の夜や女をおどすつくりごと

春の夜は男、女、殊に若い人達は色々まどゐをして慰み興ずる例であるが、折節、一つ女にからかつて嚇してやらうといふので、男同士が言ひ合せて、何か女のびつくりするやうな事をして興じて見たといふので。

嚇かされて女の怨みごとを訴へるといふことも此の後に想像されて、これも一種の情を含んだ感があるし、又、それを嚇かした所にも一つの情を含んでゐて、こゝらが春の夜の趣によくかなつてゐる。又、多少なまめいた狀態も想像される。

▲家内して覗き枯らせし接木かな

たまたま庭に接木をした。それが本意なくも枯れて了つた。この枯れたのは、家内中の者が、もうついたであらうか、もう芽を吹くであらうかと、入り代り立ち代り、それを覗いたからで、左樣に餘りに責められる所より、木も遂に生育を遂げなかつたのであらうというたのである。

勿論、かやうな關係は無いことであるが、それをかく興じて、何とはなしに關係あるがごとく感ぜしめる。これも一種の俳諧手段である。

▲關守の脊戸口に立つ涼み哉

關所の番をしてゐる人が、關所も餘り人通りが無くて間暇であつたと見えて、おのが住居の裏に立つて涼みをしてゐる。定めて夏の夕暮頃でもあらう、關所とはいへど、僻地で、或は山のほとりでもあらうといふことが、この事柄より聯想される。即ち、世の中も泰平で、打ち寛いで、夏の暑さも忘れて十分に涼みも出來る彼等の生涯を寫したものである。

脊戸口に立つといふことを捉へたのは、確に此の人の技倆であると思はれる。

▲七夕や家中大方妹と居す

これは昔の江戸の大名屋敷の趣と思はれる。これらの屋敷には、定詰といつて國許より家族を引連れて來てゐるものも多く住んでゐるし、又、獨

身の勤番者も居るのである。

折しも七夕祭の夕、かの星合の契をなす宵であるが、家中も大方は妻と共に住つてゐて、空の星と共に、各〻樂しく此の宵を送つて居るといふのである。

妻と住むといはずに、殊更に妹と古雅に言ひなし、又、その下へ居すと漢語を使つた所が、不調和なやうで、却つて一種の感じを惹き起して、七夕の宵の大名屋敷、殊に其の武家方のさまを最も可笑しく、又あはれあるさまに言ひ現はして居る。兎に角、七夕の宵の或る社會の狀況を面白く歌つたものである。

▲かの後家の後に踊る狐かな

これは例の盆踊で、色々な人が交つて踊つてゐる中に、或る家の後家が踊つてゐる。それを傍所から見た所の興である。

かの後家といへば、すでに近所あたりにも評判になつてゐる未亡人で、それが身分にも年にも恥ぢず踊つてゐる。あのやうに踊るのは其の後に狐がついてゐて、その狐が踊らしてゐるのである。で、この狐とは、自然に、若い男などが、それを嫌し誑かして操を破り、遂には皺の顔に白粉を附けて踊の仲間になるやうな淺猿しい生涯にしたのであると、遠く想像される。これも村里などには多くある當時の狀況を可笑しく歌つてゐて、殊に、後に狐がゐるといふのは、最も働きのある言葉だと思はれる。

▲剃りこかす若衆のもめや年の暮

この句は、かの蕪村の、

お手討の夫婦なりしを更衣

と並べて、唯の十七字でいかにも複雜な叙事をしてゐると、吾々仲間でも度々稱讃されてゐる句である。

さて、此の言葉に依つて考へて見ると、或る侍仲間などで一人の若衆即ち美少年を愛してゐた。それが、甲が念者となつてきまつてゐるのに、つい他の乙の者がまた念者となることになつたので、甲乙の間に一つの騒動が起きた。それが即ちもめである。で、いよ〳〵果合でもせねばならぬことになつたが、其處へ仲裁が這入つて、其の結果、つまり若衆の頭を剃りこかして坊主にし、此の者がすでにかく出家した以上は、互の言分も立つ譯であるから、これで無事に濟まして貰ひたいといふことになつて、長ら

く延び延びになつてゐた事件も、年の暮でやつと落着したといふので。

かくのごとき複雑な出來事をうまく言ひ現はした所は、誠に非凡な手段であると思ふ。

▲御影供の花のあるじや女形

御影供は『おめいかう』とよみ、日蓮上人の忌日の法會のことで、例の法華のことであるから、信者から色々のものが佛前に捧げられてある。その中に立派な花が捧げてあるが、其の捧げ主を誰かと思つたら女形の役者であつたといふので。定めて當時花形の立おやまでもあつたであらう。

一體かやうな仲間にはよく神佛の信心をして、人の目に着くやうな捧げ物をするものがある。これは、一面にはわが名の廣告にもするので、今も

昔と變らずに行はれてゐることである。これらも惡く叙べると、唯だ人事の穿ちになり行くのであるが、花形にかけて「花のあるじや」と歌つた所は、どこまでも雅致を失はずして、十分に俗に墮ちる所を救つてゐる。

▲鰒食ひし人の寢言のねぶつ哉

今しも鰒を食べ終つて、中にはすでに轉がつて寢たものもある。その內に寢言を言ひ出したが、その寢言は、よく聞くと念佛を唱へてゐるのであつた、彼奴も威張つたことを言ひ散らして、平氣が食べは食べたが、其の實、心には恐ろしく、命惜しく思つたものと見えて、死ぬる夢でも見たことか、南無阿彌陀佛を唱へてゐる。これで彼の實情がすつかり現はれて了つたといふので。

これも下手にいふと、俗一方に陷るのであるが、何處までも上品になだらかに歌つて、同じことでも念佛といはずに、ねぶつと讀むやうに綴つたのは、何處かに古雅を帶びて、此處にも此の人の長所が十分に發揮されてゐるやうに思はれる。

惟然の句十句

この二三回、滑稽飄逸的の句の作者を辿つて來たから、その序でに、今回はずッと元祿へ遡つて、同じ傾向を有する人で、芭蕉の直弟子である惟然の句を解いて見よう。

この人は芭蕉の門弟中でも最も飄げた生活をした人で、翁の死後には、

瓢を叩いて、かの芭蕉の句、

まづたのむ椎の木もあり夏木立

の後へ

音はあられか檜木笠南無阿彌陀

など、歌ひつゞけて、乞食のやうに世の中を渡り歩いた。その位であるから、芭蕉の生前からも、自然其の性質は俳句に歌はれてゐたのだが、その死後には一層突飛な風になつたので、同じ蕉門でも、眞面目一遍な去來などは顰蹙して、人とも評し合つたことが、去來抄などにも見えてゐる。

▲風呂敷に落ちよつゝまむ揚雲雀

春の野で雲雀が舞ひ揚がつたのを見て、早く落ちて來よ、我がこの風呂

敷に包んで獲物にしてやらうといつたのである。

いかにも春に浮れてゐるさま、又、雲雀に對する心持などもなるほど或る詩境にはこんなこともあらうかと思はれる。何處までも無邪氣に歌はれたところがこの人の特色を發揮してゐる。

▲悲しさや麻木の箸も大人並み

魂祭の折、子供の魂に對する感じである。わが家代々の佛を祭つてある中へ、この子も入つた。子供ながらも佛となれば、他の人と同じやうに祭られて、麻木の箸も大人並みの大きなものを供へられてゐる。嘸ぞ小さい手では持ち惡いことであらうといふのであるが、かういふ中に無量の悲み悼む趣があつて、そして何處までも俳諧的土臺を失つて居らぬ。これも此の

人でなければ歌へぬ句柄であらうと思ふ。

▲別るゝや柿喰ひながら坂の上

これは或る時、翁の旅立ちを送つた句である。今お別れ申す。其處は坂の上で、柿を食ひながら別れの言葉を叙べるといふので。

門人が師匠の首途を送る句としてはいかにも無作法のやうであるが、此處が此の人の特色で、又翁にも一種變つた奴だと愛された點であらう。

▲煤掃や折敷一枚踏みくだく

煤掃といへば、一家擧つてどたばたと働き騒ぐ。すると自然、その中に

は色々な失策もある。

今其處へ折敷即ち膳のやうなものを收出した。と、はや其れを一人が踏み碎いて了つた。誠にそゝつかしい奴であるといふので。

其の有樣を畫くがやうに、手輕く歌つたところが面白い。

▲せき候や疊へ鷄を追ひ上げる

節季候は例の籠を叩いて、騷がしく賑やかに門内などへ躍り込むものである。その爲めに飼つてある鷄が驚いて疊の上へ上つて來た。即ち節季候に追ひ上げられて、鷄が家の内まで駈け込んだといふのである。

これも歳末の出來事として、誠に可笑しく又その實境が眼前に活躍してゐる。

以上は七部集あたりにも見えて、即ち芭蕉生前の作である。而して以下に擧ぐるものは、芭蕉死後のものと思はれる。これについては去來などは多少異議を發したもので、翁の在世に此の人の特色を餘りに賞讃された爲めに、それが極端に走つて了つた。あれでは困るなどゝいつてゐる。

▲梅の花赤いは〳〵赤いはな

殆ど解するにも及ばぬ位である。梅の花の赤いところを感じて、それを繰返して讃嘆したので、無邪氣で子供らしく歌つた所は、さすがに瓢箪を叩いた乞食生涯が現はれてゐる。

▲涼まうか星崎とやらさて何處ちや

星崎は海岸などであらうか。其處へ行つて涼まうかと思ふが、さて其れは何處であらうかといつたので、いかにも無造作に思ひ切つて歌つてある。

▲錢百のつかひが出來た奈良の菊

錢が百文貰ひ溜めてある。何に遣つてよからうかと思つてゐたが、たまたま奈良へ來て見ると、菊の花が美しい。あれでも買つたら、この持て餘してゐる錢がなくなるのである。やつとのことで厄介物をなくすことになつたといふので。いかにも洒脫、飄逸を極めた句である。

▲彦山の鼻ひこ〳〵と小春哉

彦山は九州にある山の名、その山の鼻が小春日和に聳えてゐる所を見て

歌つたので、鼻といつた所から山の名に緣をとり、ひこ〳〵と形容して、折しも小春日和を山も得意げにしてゐるといふのである。

なほ彦山といふのが、人の名の何さんといふのに通ふ所から取つたのかとも思はれる。これらは少し俗に墮ちたと云へばいはれる句である。

▲水鳥や向うの岸へつういつい

水の上に泳いでゐる水鳥が、遽かに方向を定めて、向うの岸指して歩き行くさまであるが、つういついといふのがいかにもよく水鳥を眼前に浮ばせる。

この惟然が右の乞食生涯になつて後に、途中で娘に逢つた話がある。娘

といふのは早くより別れて或る豪家の家内になつてゐたが、久振りに逢つた父が、餘りに見苦しいなりをしてゐるので、覺えず涙を流して取り付いた時に、

▲兩袖にたゞ何となく時雨かな

と歌つたといふことである。たゞ何となくが何處までも此の人の面目を現はしてゐるが、又一面には、非常に熱い涙も籠つてゐると思はれる。

兎に角、惟然は、俳人中でも一つの特色を持つてゐる人で、やゝこれに似た人に同じ蕉門で、路通といふのがあるが、この人は餘程俗氣があるやうである。

西鶴の句十句

芭蕉系統以外の人に井原西鶴がある。

此の人は明治になつて一種の文學上に名を認められた人で、其の著作等は今日に於いても大に賞讃されてゐるのであるが、さらば俳句は？といふに、これは當時に在つて別段出色な所も見えず、やはり貞德門下の諸子などゝ大した變りはない。尤も、談林派の宗因の門弟だといつてはあるが、さらばといつて宗因風の口調も見えぬやうである。

で、今回解釋するものは、彼が俳句の中でも、兎に角比較的俳句として認められるものを選ぶことゝする。

▲蓬萊の麓に通ふ鼠かな

蓬萊は例の年始の飾り物であつて、それへ鼠が餌を漁つて近寄るのを、その麓に通ふと言ひ做して趣を添へたのである。即ち、目出度い蓬萊山が戀か、あらぬか、兎に角鼠の所業は一種可笑しなことであると興じたので、麓に通ふといふ言葉がこの句の魂である。

▲わが戀の松島もさぞはつ霞

此の人は此の時まで松島を見てゐなかつたものと見える。年々松島を見たい見たいと思つてゐたが、まだ其の機會も到來せぬ中に、また春となつた。松島もさぞや春の初霞が立ちこめてゐることであらう。この景色はい

かばかり趣があらう。かういつて年立つ始めに豫てから遊びたいと思つてゐる松島のことを思ひやつたのである。

わが戀と、松島を擬人的に戀人になぞらへた所と松と待つとをかけた所が、この句の趣向で、即ち俳諧手段であると思はれる。

▲只の時も吉野は夢の櫻かな

吉野山といへば音に聞えた櫻の名所であるから、誰も皆な、その櫻のことのみを、見た者は想ひ出し、見ぬものも想像する。そこで、春の外、夏、秋、冬と花のない只の時でも、吉野といへば夢もなほ櫻のことばかり見てゐるといふのである。

何處までも吉野は櫻と相離れぬ名所であるといふので、これは趣味とい

ふよりは寧ろ理窟に傾いてゐる。こゝらはまだ貞德の風調に屬してゐるを免れぬといつてよからう。

▲長持に春かくれゆく衣がへ

もはや夏となつて更衣をすることになつた。で、春の衣はすべて長持などへ始末をして了ふ。それを春が長持の中へかくれて了つて、そこで夏の季節となり、わが身につける衣も輕いすがゝしいものとなつたというたのである。

これも衣といふ所から長持といひ、それへ春がかくれたといふ如き言葉を用ゐたのは、やはり理窟を帶びてゐて、後來の芭蕉の派から見れば、何等の價値の認められぬ句である。

▲花なき山薪にせぬもほとゝぎす

すでに夏に入つて山にも花がない。さらば其の樹木は切つて薪にしてもよい譯であるが、それをせぬのは一つの譯がある。時しも時鳥が啼くのであるから、それに景色を添へる爲めには色なき木も其の儘にして置いて、綠する梢に其の聲を聞かうとするのであらうといつたのである。

これも客觀的に、新綠と時鳥を聞くことゝのみを歌へば一つの趣きをなすのであるが、「薪にせぬ」といふ理由から說き起して行く所は何處までも理窟になつてゐる。尤も理窟としては可笑しな理窟で、滑稽ではあるが、其の滑稽が趣味に訴へずして智的になつてゐる所はやはり當時の缺點である。

▲鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

これは何處で詠んだのか我れは今記憶して居らぬが恐らくは或る山里などの吟であらう。兎に角深山住居で、海に遠いから鯛を食つたこともない、又、櫻の花の如きも全くないでもないかも知れぬが、それらを見て樂しむなどゝいふこともない。つまり、口によき味ひ、目に美しき春の景色、其の何れをも知らぬ輩であるが、唯だ今日の月即ち十五夜の明るい月ばかりは其處をも照らして、其の里人もさすがに打ち眺めて知らず乍らに月見の興を催ふしてゐるといふので。

この句に至つては大ぶん理窟を離れて、何處か興に訴へた所もあり、殊に「鯛は花は」といつた所などにも言葉に可笑しい節がつけてあつて、何處

かに浮れ興するさまのあるのは、俳句として多少の價を與へてもよいやうに思ふ。

▲草淋し寺と宇治との其の間

これは宇治での吟であらう。今作者が其處を歩きつゝある。それは例の平等院とか黄檗山とかの寺でもなく、又、宇治の流れの川岸でもなく、それらの間をあちこちしてゐるのであるが、周圍に草が生ひ茂つて淋しい感じがするといふのである。

この句は文字の上からは四季の何れに屬するか分り兼ねるが、先づ夏草の生ひ茂つてゐるのへ、多少の昔を偲ぶ感を寄せた懐古的の句であらうかと思はれる。

これも別に理窟も加はらず、なるほどかやうな境地に立たば、かやうな詩的趣味が起るであらうと、吾人にも思はれる句である。

▲秋の風藥違ひをせぬやうに

秋風立ちてだん〳〵季候が冷やかになれば、人も病氣に罹り易くなるものである。すでに己れか家族か風邪にでも罹つたものと見える、そこで買ひ藥をしたか又は藪醫者殿に懸つたか、兎に角藥を貰つたが、それが病に適當せぬ、藥違ひをせぬやうに氣をつけねばいかぬといつたので。言外に、秋の淋しく侘しく何處か便りなく人生の衰へに向つて心細く感じるやうな所を歌つてゐる。

これらは何處までも芭蕉以前の口調であるけれども其の精神はすでに後

來の眞の俳句にも通つてゐる所がある。

▲冬籠り長寢しからぬ人となり

冬ごもりをして爲すこともなく日々隙であるから、朝も長寢をしてゐる。けれども、別に早く起きろ、長寢であると叱るものもなく、誰にも許されて長寢の十分出來る人と、もはや成つて了つたといふので。世に遠ざかり世の中に何等望みもなく、唯だ侘しく淋しい生涯を送つてゐるといふ樣な感を叙したものである。元來は叱られぬ人といふべきであるが、口調の爲めに他より言葉をて立て叱らぬといつたものと思はれる。或は人の長寢を叱らぬやうな寛大な人になつたとも解されぬこともないが、それでは冬ごもりの意には切實でないやうに思はれる。

▲大三十日定めなき世の定め哉

大三十日は誰しも此處一日といふ所で、わが年の寄ることを嘆じもするが、又、春待つ多少の樂みも持つものである。又一面には一年中の用事を取りつゞめて借金などは成るたけは拂ふといふやうにする。この心はすべての人に渉つて、昔より今まで同じお定まりの感じである。世の中は無常迅速で、何の定まりもないというてはあるが、此の大三十日だけは、其の定めなき世に定まつた即ち紋切形の一日であるといふので。一つの悟り顔なる言葉を書いて、裏面にはやはり滑稽の意味が存してゐる。併し何處か理窟臭い所を免れぬのは西鶴の頃の句かと思はれる。

われは西鶴物は餘り詳しくは見ては居らぬが、一體に洒脫に思ひ切つて、人間の丸出しを叙寫した所などは、當時の人間としても一種非凡な所があるやうに思はれる。されば、俳句に於いても機軸を出して、奇拔な想とか又は思ひ切つた磊落放膽なことゝかを言つてあらうかと思ふに、さほどの思もない。やはり人には長所短所があるものであるから、此の人は散文には長じてゐても俳句のごとき短詩形の律文には不得手であつたものかと思はれる。

鬼貫の句十句

西鶴と同じく、芭蕉派以外に立つた人に上島鬼貫といふ人があつた。こ

の人は攝州伊丹の人で、談林の宗因の門流を汲んで、芭蕉派の人々とは始終相對立してゐた。所が、これより先き、同じく宗因の門に松井宗旦といふ人があつて、この人もやはり伊丹の人であつた所から、鬼貫が家を爲してからは、伊丹派といふ名稱が世に認められた。即ち伊丹派では宗旦が先輩で、鬼貫が益々それを大にしたといふ關係になつてゐる。尤も鬼貫は常に多方面に交際して、芭蕉派の人々と連俳などをしたこともあるが、兎に角芭蕉派以外に一時名を出した人であつた。

▲春立つや星の中から松の色

春立つといへば、立春の第一日のことをいふごとく聞えるが、この句の意味に依ると、寧ろ年の始を歌つたものゝやうに思はれる。作者に依つて

は、年立つとも亦春立つともいつて元朝を歌つた例が幾らもある。已に國の春とか千代の春とかいふ春は、全く年立つ朝の春であるから、曖昧のやうだが。其處は句に依つて見分けをつけなくてはならぬ。

さて、その句を全く元朝のことを歌つたものとして解いて見ると、この朝に早くから起出でた。空を眺めるとまだ曉の星が輝いてゐる。周圍は微暗い。その内次第々々に明るくなるにつれて門松の綠の色も見えるやうになつた。それが星の光と相映じて、星の中から松の色が生じて來たやうに眺められるといふのである。

一方にまだ日は昇らず、東雲の景色をこの目出度き人心の上に眺めた所がよく歌はれてゐて、殊に「中から」といふ言葉は、此の人の一つの手段のやうに思はれる。系統は談林派に屬してゐても、大家だけに、もはや句風

は確かに變つてゐて、寧ろ芭蕉派の感化を知らず識らずの間に受けてゐたやうに見える。只だ芭蕉派と比較すると、さら〳〵とした洒脫といつた肌合を多く持つてゐるやうに思ふ。現にこの句を見ても其の俤が見えるではないか。

▲春の水とところ〴〵に見ゆる哉

已に春になつて水が流れてゐる。何れも春らしい音を立て、綠の色を見せて、其處にも此處にも流れてゐるやうになつた。いよ〳〵春も來て景色も面白くなりつゝあるといふので。

この句は印象の明瞭を求むるといふ點からは不十分であるが、或る現實の景色を叙するに一種の想像を加へて、其の方面を頗る大きくしたものとして見て面白い。即ち唯だ或る一局部でなくして、春に逢つた詩人の其の周圍に對する景色上の感を歌つたものゝやうに思はれる。同じく客觀といつても一局部の客觀でなくて、現實の眼の及ばぬ所までも想像を借りて見渡したといふ趣がある。蕪村に、

春の水山なき國を流れけり

といふのがあるが、或は此の句に本づいて今少しく意匠を加へたものかとも思ふ。尤も、「ところ〴〵に見ゆる」といふのは、今、春になりつゝあるといふことを現はしてゐて、蕪村のよりも春の初期であるといふ所が異ふ。

▲口べにの初花ゆかし玉椿

玉椿は椿の花を愛でもし形容もした稱へである。椿の初花が人の口べに

を差した如くほんのりと赤く咲き出でた所は、誠にゆかしく思はれるといふので。

單に赤味を人の口べにと比したばかりでなく、それより更に深くこの花を人の如く思ひやつて、初花といへば、人もまだ年若き少女の頃だ。その年若き少女のべに附けた趣に似てゐて、また別段の眺めに入るといつたので、即ち例の擬人法を微に用ゐたものである。

▲戀のない身には嬉しや更衣

今、季節であるから衣を更へた。舊き衣を脱ぎ捨てゝ新しくなつたのは氣持もよくて嬉しく思はれる。これもわが身には戀がないからで、若しも戀があれば、その人と慣れ親しむと共に自然に移り香も殘つて、脱ぎ捨てるには惜しい所もあらう。それがないから只だ新らしい愉快のみを感ずるのであるといふ洒脱なる生涯を輕く歌つた句である。

▲涼風やあちらむきたる亂れ髪

其處に人が坐つてか腰懸けてか、兎に角つんとすねた風に、うしろ向いてゐる。其處を夏の涼しい風が吹いて、其の爲めに其の人の髪が吹き亂されてゐる。

かう叙したまでゞあるが、自然に其の人は女で、髪の吹き亂されてゐる姿が、心憎くも思はれるといふ趣がある。その顔も見たいけれど、生憎見えもせねばまた見せもせぬ。さても心憎く懷かしいことであると、いひつもなほそれに心を惹かされて、その樣が一種心に涼しくもある。つまり、

つれなき人と思ひつゝもなほ其の心に依つて夏の暑さも戀の心も一面に慰む所があるといつたやうな意味である。

解き方は少し念が入り過ぎたかも知れぬが、兎一角この句などは、其處の景色が眼前に浮んで來て、涼風一陣に髪の亂るゝ輕き趣が十分に見えるのである。

▲どう寢ても確かな秋の寢覺哉

秋の夜、寢て目覺めたが、何處かに冷やかな感じがする。あちら向いて寢てもこちら向いて寢ても、どうしても此の感があるといふので。

これまで夏の暑さに慣れたから着た衾も定めて薄かつたであらう、或は着ずにゐたかも知れぬ。所が秋が來た。秋となつたので、かやうな寢覺を

感ずるのであるといふので。

表はこれだけであるが、裏面には何處か秋になつてわが生涯の淋しみを感じ、或は戀する關係もなくて、獨り寢の淋しみを感ずるといふ趣も見える。

▲によつぽりと秋の空なる富士の山

秋の富士を眺めた趣きで、其の樣がによつぽりとしてゐるといふのである。他の氣候よりも此の秋の空の富士は變つた趣に眺められて、それがかくのごとき感じであるといふのだが、この「によつぽり」は何と譯してよいやら吾も困る、斯樣な形容詞は音に依つて其の意味を現はしてゐるのだから、誰しも「によつぽり」といふ言葉其のものをよく味つて見たならば、「秋

の空なる富士の山」の趣が分る筈である。

けれども、強ひて解釋を施せば、空の澄み渡つてまた聊か淋しみを帶びた所に、かの芙蓉のごとき山が、周圍には無頓着に高く獨りぽッちに聳え立つてゐるといふことに、今少し味を附けた形容であらうと思ふ。芭蕉の句の、

梅が香にのつと日の出る山路哉

の「のつと」も解釋が出來ぬが、この句の景色には「のつと」が最もよく叶つてゐると同樣である。

さて、この句は全體として餘り勝れてゐるとも思へぬが、「によつぽり」などゝいふ言葉を斟酌なく使つた所がこの人の特色を現はしてゐると思ふ。

▲昔やら今やらうつゝ秋の暮

秋の暮は淋しい、わが生涯もそれに連れて便りなく感じられる。で、わが身は如何なる世に處してゐるのであるか、この世間の人であるか、なほ古代の人であるか、それも自ら分らない唯だ茫然としてゐるといつたので、其の趣を「うつゝ」といつたのである。

元來この「うつゝ」は、夢に對して、それが覺めた現在をいふのであるが、時として「うつゝな」といふ所から轉じて、「うつゝ」といつたゞけでも何か判然とせぬ心持に使ふこともある。そこで此處へは昔やら今やら分らぬといふ所へ此の言葉を用ゐてあるので、これらの俳句の俗習は先づ〳〵許してもよいと思ふ。

兎に角、或る情懷を言ひおほせた句である。

▲ひゆう〳〵と風は空行く冬牡丹

冬のことであるから、空は烈しい風がひゆう〳〵と音立てゝ吹いてゐるけれども、牡丹は美しく咲いてゐて風には少しも頓着がない。風には勝手に空を吹き行かせてゐて、即ち風は風、牡丹は牡丹で、各景色を呈してゐるといふのであるが、なほ何處かに牡丹ながらも冬牡丹は淋しき中に淋しく咲いてゐるといふ意味も現はれてゐるのである。

▲つく〳〵と物のはじまる火燵哉

冬が來て火燵を開いた。それに當つて寒さを忘れると共に、靜かにわが

身のことも考へて、世の浮沈も心に浮び、つく〳〵と思ひつゞけるやうになつたといふので。

かやうなこともこの火燵を開いた頃から起ることで、これまでは世間にも立交はり身も働いてゐたから、心も沈み勝ちにはならなかつたが、火燵を守るやうになつてから、いつもかやうになる。それを火燵から始まるといつたのは聊か理窟つぽくなつたやうに思はれるが、「物のはじまる」と歌つた所などはやはり此の人の特色だと思ふ。

以上は、先づ多くは成功した句であるが、兎に角一種の特色があつて、芭蕉以下の門人に對してもさほど劣つて居らぬ。また系統は談林派であるが、其の派の口氣は右の句などには殆んど見えてゐない。其處が即ち伊丹

派の大家たる所であらうかと思ふ。

夏と句作の快味

われの子供時代は、夏と云つても、矢張り平生と同じやうに勉强し、又少し許り役に就いてゐる者でも、右と同樣、平生と異らない勤務はせなければならず、これが夏だと云つて、決して平常と異つた生活はしなかつた。いふまでもなく夏は暑い、暑いとは感じるが、たゞ平生と同じやうに學問なり、勤務なりしてゐたもので、これを他の春、秋、冬に比すれば、幾分か學問、勤務に倦んだ位のもので、其の他別に何も變つたことはなかつた。

殊に、われの家は士族であつたから、他の農工商と異り、最も武骨の生活をしたものである。如何に炎天の日でも、決して笠など用ゐられず、炎日を頭に戴き、聊かこれを避くるものはなく、腰には常に重い大小を二本挾んでゐたもので、武藝の如きも亦、屋根のない地面の一區域に一寸した柵を設け、其處で全身に燒くやうな炎熱を浴びながら、一生懸命劍術の稽古をしたものである。

それから、その頃は學問する者も、勤務する者も、通じて、一日、十五日、二十八日の此の三日が特別の休み日であつたが、斯る日は、少年から壯年までの人が殺生と稱へて、多くは海川に魚を取りに往つたものである。常には、少年も大人も必ず袴を穿かねば學問所へも、勤務所へも往かれなかつたものであるが、此の殺生の時に限つて、一刀丈けを携へるばかり、

腰を端折り、草鞋を履き、魚籠を持ち、殊に笠が着けられたもので、此の時は全く、平生の物堅い武士ではなく、此の社會を脱した樂しみをしたものである。

しかし、此殺生とて單に物見遊山の目的ではなく、川や、海に身を投じ、船を漕ぎ、又は小銃を肩にして山に獵をする時などもあつたが、何れも此等は筋骨を練る爲めで、決して如何なる時でも武士は徒らに樂しまず、身體を鍛へる爲めにやつたものである。だから、われなどは夏と雖も、やはり炎日に曝され、此の通り武藝や、右の殺生をして、筋骨を練つたものである。

又、これはわれ一人の實驗ではないが、他の農工商と雖、武士と異らず、殊に農人などは此の夏季に最も働かねばならず、麥を刈り取つてそれを仕上げる。苗代が育てばそれを早苗と稱して植付けする。また、これが生ひ立てば湯の如く沸き立つ水の中に入つて、雜草を取る。その他水が不足すれば、水の爭論が始ると云ふ風で、夏は最も忙しい。常よりもなほ一層勞働しなければならぬものである。

又、工業に從ふ者も、他の周圍が總て安逸を貪つてゐないから、やはり同じやうに働き、城下その他に於ても、狹い家の中で炎熱に苦しみながら働くと共に、工業以外に又商賣などもしたものである。殊に商工の如きは、内實は有福であつても、外面は小さくして、大きい家屋などは造らなかつたもので、その頃我が城下には二階建ての家屋などは更になかつたもので君公の家ですら平家であつたから、武士の家に二階建の家のありよう筈な

く、況して、町中の工商の家などは、極く道路の狹い、小さな平家の中に在つて、暑さを凌いでゐたものである。

それに我が國は、西に海を控へ、東に山を脊負つてゐるから、夕風は更に吹かない。伊豫の夕凪と一般に稱へられてゐた位で、晝よりむしろ夕方の方が暑いので、夜と云つても碌々眠られない。だが、己れの居宅を去つて、納涼などするやうなことはなく、君公と雖も、平常と異らず生活して居られたので、士民とて同樣、各々勤めを怠らずやつてゐたものである。これは決して我が藩許りでなく、當時他の藩に於てもやはりこれと同じことだと想像する。

そして、廢藩後われが東京に移つてからの夏季と云つても、やはり田舍

の生活の時と更に異らない。旅行と云つてもこれまでやつと二日の日數で江ノ島、鎌倉を見物して歩いたのと、それから三日がゝりで日光を觀て歩いたのが前後二回と、鄕里松山に往つたことが僅かの日數で三回、これがわれのこれまでに於ける夏季の旅行で、今日まで三十年間、その他に夏季の旅行と云つて、何もしたことはない。今日は自由さへ得れば、涼しい處へ旅行し、身體を休め、面白い遊びをして夏を過す人もあるが、われに限つて、今日も封建時代の夏と少しも異りはない。

たゞ、その頃と異つて難有いのは、夏も氷があり、ラムネあり、サイダーが飲まれ、遠方に行くにしても、自分の足でコツ〳〵歩かずとも、電車汽車があると云ふ風で、これは全く文明の賜物である。この爲め、夏もその比よりは餘程凌ぎよい。

それで、われには元來主義などはない。明治二十四年までは官吏として隨分忙しい生活にあつたが、その後俳人生活に入り、今日に至つた。俳人生活に入つてから忙しいのは最近十年ばかりのことで、その以前は比較的間暇であつたが、何日になつても貧乏は昔と更に異らず、從つて今日は何處へなり往けば往かれる境遇にありながら、やはり此の一點の爲め、夏季と雖、家に止つて勉强してゐる。たゞ、われは他の人が、今年は海へ往つたとか、溫泉へ往つたとか或は山へ登つたとか云ふ話を聞いて、それを羨しく思つてゐる位に止る。

然し、われは幸ひ俳句を作る。此の俳句は最も洒脫、飄逸、淡泊に富んだもので、遙に人間を超絕した思想で言顯はすものである。つまり、總ての社會を第三者として、可笑しく笑ふやうな文學であるから、これを樂しん

でゐる時は、全くいふにいはれぬ興味を覺え、それに心を傾けてゐれば夏と云つても、自然に此の身は驅り廻つて、宙天を高く飛び廻つてゐるの思がある。

故に、人は暑を避ける爲めに涼しい處へ往き、船、車に乘つても、われは此の自分の居間に於て、より以上の面白味を感じ、愉快に夏が過されるのである。玆に至ると、他の人々より最も手輕で、隨意氣儘の避暑をしてゐられると云つてよからう。しかし、これは貧乏の者の負惜みか知らないが、兎に角われは然う信じて、此の俳句の爲め愉快に夏を過してゐる。

俳味と實業

近き以前迄は、今の俳句は發句と唱へて居たが、偶々正岡子規が我々の今日執りつゝある俳句を唱へた際に、俳句といふ名稱を別に創めたのである。尤も俳句といふ文字は、よほど前よりあつたものだが、今日の如く普通に用ゐるやうになつたのは明治になつて、我々の仲間が唱導したに依るのである。

此の俳句即ち發句は足利の末より始まり、豐臣を經て德川となり、松永貞德の出た頃、俳諧連歌の盛んになつたと共に、單に發句のみを咏ずるものも盛んにして、其門人も次第に多くなり、遂に各々一家を立つる樣になつたのである。然るに其當時いさゝか別機軸を出したものに西山宗因といふがあつて、別に一時を風靡し、貞德派に對して談林派と唱へて居た。

而して、その咏ずる趣味を見るに俳諧即ち滑稽といふ事が主となつて居て、殊に最初の宗鑑などの俳句は卑猥なる滑稽に流れて居た。それから貞德派となつては、理窟の方面に傾き、主として智的の滑稽を弄する樣になつた。談林派に至るや、更に一變して口合洒落的の滑稽に重きを置く樣になつた。要するに何れも滑稽專門であつて、其滑稽が超越、優美、溫雅、幽玄等の點は殆ど絶無にして、唯文字に關する通俗的遊戯に過ぎないというてもよい程であつた。然るに芭蕉の出づるに至り其風を刷新した。尤も最初はまだ以前の風を學ぶを免れなかつたが、一朝大に悟る所あるや、自己の胸臆より新趣味を發揮し即ち今いふ文學的の俳風を唱導したので、そ

れが即ち我々の今日推戴し依遵する所の俳句である。

併し文學的の趣味にも滑稽は其一要件ではあるが、餘りに卑猥にして又理窟に傾き、或は駄洒落のみを吐く事は、文學としては價値が少ない。之に反して芭蕉の咏ずる所の俳風を觀るに、超越、優美、溫雅、幽玄等の點を專ら咏じて居るから大に趣きが違ふのである。此の風は即ち我々が常に從ひつゝある處であつて、又假令芭蕉は俳句の元祖なればとて、强ち其規矩のみを固守しなければならぬといふ樣な事はなく、今日は今日の時勢情態に隨つて如何樣に作るもよいが、十七字的文學が芭蕉によりて創開されたものとせば、多少の變更はあらうとも矢張吾々は芭蕉の門流たる事は、到底免れないのである。如此、芭蕉の俳風は文學の趣味に合ひ一時は非常なる勢力を以て、全國を風靡したものであるが、其の頃の多くの國民の、學

問智識の程度がまだ甚だ低くつて、中々それ等の人には此の文學の趣味を解する事が出來ぬ。夫故芭蕉歿後門人等が段々門戸を構へて、ひろく門弟を集め各々そ〻家風を立る事となつては、勢ひ多くの人に解せらるる趣味を採用し、多くの人の學問智識の程度に附き合つて行く必要を感じたのである。然るにそれ等多くの人には、前にいつたやうな超越、優美、溫雅、幽玄等の趣味は適せずして、專ら手近な人事の穿ちとか、又は通俗的の喜怒哀樂とか、或は客觀の景色でも陳腐平凡のもののみを咏ずる事となり、芭蕉當時の趣味の深い處は、漸々と失はれてしまつたのである。

大勢が已に然うであるから、俳句の師たるものは何人も其風に化せられ、此等の俳句にむかつて相當の點を附して、甲乙を判し、優劣を定むるの止むなきに至つたのである。蓋し何人と雖も飯を食はずに俳句計り出來るも

のでないから、生活上の要求からも、自然大勢の趨く處に從はんければならぬ樣な場合となり、爲に折角芭蕉によつて文學の域に入りしものを、再び軌道を逸して野卑の軌道を辿るべく餘儀なくせしめた。尤も野卑なる俳句といへばとて、全く文學でないともいはれまいが、結局高尚にあらずして野卑なる文學となつて仕舞つたのである。於此俳句は殆ど再び芭蕉以前の風に逆轉したといふ事になつた。

然るに其後百年後、即ち天明の頃蕪村等の數輩が此の狀態を默視するに忍びずとなし、芭蕉當時の高尚なるものに引き戻さんとして、此に再ひ超越、優美、溫雅、幽玄等のものを咏じ出したのが、即ち天明の中興と稱するので、此の勢ひに風靡されて、一時其の旗幟の下に歸順したものも少なくなかつた。併し元來學問智識の發達せざる時代故、所謂寡は衆に敵せず、

全國に其風を普及するに至らずして、蕪村始め其他の人々が歿したので、遂に中興の俳風も再び頓挫し殆ど消滅するに至つたのである。斯くの如くにして、通俗的俳句は其勢を增して、愈々盛んになり、文政天保は其隆盛の絕頂に達し、明治の始めに至つても、容易に下火の模樣は見えなかつたが、一度開國と共に西洋の文物が輸入され、また我邦固有の文學も復興した結果として、衰頽した俳風もまた其儘に居る事は許さぬ。新面目を開くべき時機となつた處へ、偶々正岡子規が、それの要求に應じて、遂に今日我々の作りつゝある俳風を唱へたのだ。上は元祿天明の趣味に溯つて其規を取り更に西洋文學を參酌して、天下に號令したのが、つひに今日の大勢となつて、多少の學問あるものは、往々之れを玩び、玩ばん迄も價値のある事を認めるやうになつた。已に今日は內地又北海道琉球臺灣は勿論、遠

くは米國滿韓地方苟も日本人の住する處は、我々の俳句を玩んで居る。

我々の俳句趣味は上來の如くであるが、なほ一般國民の學問智識はまだ十分に發達したといふではないから、矢張芭蕉歿後の如き程度の者も少くない。否、まだ〳〵多數である。從つて此等の人々は我々の俳句趣味を了解する事は、餘程困難の事だと思ふ。それであるから自然是まで唱へられた通俗的俳句を玩ばんければならぬ樣な狀勢である。是れ固より止むを得ざるによるもので、總ての事物は其需要者によつて供給の異なるが如く、同一俳句と雖も、其需要者によつて求むる處の趣味も異なり、また各自の分に應じて樂しむのだから、一つの鑄型に入れやうとするのは無理であると思ふ。我々は通俗的俳句に遊ぶ事は出來ないが、其存在は實によろこばしき事である。

即ち、現今の俳句を大別せば、高尚の俳句趣味、通俗の俳句趣味といふ事が出來る。而して高尚の方を慕ふものは稀れで、通俗の俳句趣味を慕ふものが多數である。

そこで尚一歩進めて、俳句の趣味に就て一言せば、我々の趣味は僭越ながら、高尚の趣味といはなければならぬ。その證據は具體的にいろ〳〵の俳句に活現して居る。尤も悉しくは元祿以來、天明や明治の作品に就て吟味せんければ解らんが、兎に角通俗的よりもたしかに數等拔け出たものであると信じて居る。此差違は啻に俳句のみでない、彼の音樂にしても高尚なものは一般人には解らない。其他繪畫なり彫刻なり何に限らず文藝品のよきもの程少數人に歡迎されて、多數の人の好むものは、通俗的にして趣味の下つたものであるといふ事は、事實の明かに示す處である。されば獨

り俳句のみが此の例に漏るゝものでない、自然多數の人は我々の趣味を解し得る事は、中々難い事と思ふ。けれども俳句の特性として假令高尚であれ、又は通俗的であれ、共に一種洒脫の風があつて而してどこか淡泊なる點は多少に限らず持つて居る。それは何によつて然るかといふに、詩形が極めて簡單なる十七字であるゆゑ、此れによつて或る感想を歌はんとすれば、其人の頭に大した考へはなくとも、詩形に餘儀なくされて知らず〳〵洒脫にして淡泊なる感想を構成し來るのである。

蓋し簡單なる語の中には、複雜なる語よりは、多量の含蓄餘情を持つて居る。所謂語多ければ品少しといふ譬の如く、長くなればいろ〳〵しつゝこく、ねばくるしく又厭味な事もまじつて來るのである。が、簡單なものにはそれの恐れがない。かくの如く俳句には一種の俳句趣味ともいはるゝ

ものが出來て居て、それは自然に今日の社會に生活して居ながらも、どこかに人間社會を脫離して、人間生活の煩悶を慰藉する事ともなり、又間接に多少品性修養上の工夫ともなるのである。

如此說き來れば、俳句が人生の上に如何なる關係を持つてゐるか、殊に、俳句と實業との關係はどうであるかといふことも、略々推定さるゝであらう。先づ實業といへば其形式には樣々あるが、要は經濟的生活にして物の損益を主とし、常に生存競爭の舞臺に立つて居るもので、一言せば金が欲しゞといふに歸する。その金を握るには如何にせば、思ふ存分に握れるかといふ事に始終煩悶し、何でも元手少なにして益を多くしたい、機會好くば濡れ手で粟でも握りたい樣な考へを起し、旨く握ればかう爲ようあゝ爲ようとの一念の外何もない。尤も是が自然に國家社會の爲にもなり、所謂

殖産興業富國强兵の基にもなるので、此の競爭によつて人類は今日の生活をし、社會國家も亦存在して居る。日々此の方面にのみ熱中せば自然に勢力を疲勞する故、時々それを慰むる方法を取らんければならぬ。

殊に斯る業務に從事して居るものは、いつも得意許りの時あるものでなく、時に或は失意の境遇に會うて、意外なる行違ひの爲め、煩悶苦痛の逆境に陷る事がないとも限らぬ。そこ迄行かずとも朝夕に不平とか不滿足といふ事は、いつも免るゝ事の出來ない狀態である。斯る時に當つて他に感情を一轉し餘裕を存せば、玆に苦境を脫し得ざるまでも、多少その不平不滿を除く事が出來る。此の不平不滿を除くの法は種々あつて、酒色に豪遊を試みて快を一時に取るものもあるだらうし、碁、將棋、生花、書畫、骨董などを娛むものもあらう。又芝居、角力、音曲等に耽るものもあらう。

けれども以上は概ね金と時間とを多く費やし富者にも損耗する事多く、貧者には到底出來る事が少ない。然るに此に一つの不平不滿病を退治する良藥がある、それは俳句である。俳句を措て他に貧富を通じて娛樂を博し慰藉を得る方法はないと思ふ。ひろき世の中を見渡すに、俳句に溺れて死んだ人もなければ、俳句によつて身代限りをした人もない、否固より大した費用などのかゝる筈なく、又十七字位をひねるのであるから、例へば營業家の忙しいものでも、道をあるきながら、會社や商店へ往復の傍ら、それを考へれば隨分出來る。追々趣味に慣るれば實に愉快なものである。即ち一本の筆、一枚の紙さへあれば優に不平不滿病が退治せらるゝ事となるのだから、世上又此れより安き良藥はなからうと思ふ。尤も斯ういつたならば、其師匠などはどうするかといふに、それとて大した心配はいらぬ、何

處かで先輩の俳人を一人頼めばそれでよいので、敢て漢詩を作る樣に漢學の素養を要する譯でなく、又和文を作る樣に敢て國學の研究が必要でない。俳人たらんには今日普通の言語が解ればそれでよいので、其上に聞きかちりでも好いからちよい〳〵と雅言と漢語とを交へたら更に一層立派なものが出來る。今日は新聞や雜誌の讀めぬ人は少なからうによつて、それだけの文字の智識があれば大抵出來るのである。されば、俳句は實業家の唯一の慰藉物といふ事が出來るだらうと思ふ。慥に弊害のない天下一品の慰藉物である。此の慰藉が自然に所謂精神の養ひともなり、更に又進んで目的の事業に從事して鋭進する事も出來るだらうと信ずるのである。而して其結果は順境得意の場合に達する下地ともなるのである。故に俳句は實業と直接の關係はないが、それを玩ぶ効果は、間接には實業上極めて必要の

ものであると思ふのである。

尙、いふべき事は、實業の目的が既に金なる上は、非常なる大人物の外は動もすると人間本來の面目を沒却して、吝嗇とか、野卑とか、殘酷とか、狹隘とか、不人情とかいふ方面に知らず〳〵陷つて仕舞ふ傾きがある。尤も先天的善良なる人は、如此事はないが、多くの實業家の傾向は、此の過失を免れないのである。が、如何に實業家は利益を目的とするものなればとて、此の如きは甚だよろこばしき現象でなく、其業務上の目的を達する上に於ても、一面に餘裕あり溫雅なる品性を修養せねばならぬ。此の品性あつてこそ、己れよりも上流の社會に信ぜられ、同等の人の交際も圓滑になり、又配下のものをも懷けて行かるゝのである。然らば其、品性は如何なる方法を以て修養すべきかといふに、それには宗教とか道德とかいふも

のがあらうけれども、彼等はあまりに嚴正にして、萬人悉く實行の出來よう筈はない、又實業家には隨分窮屈であらう。此の點より推せば俳句は實に適當のものと思ふ。なせといふに俳句には宗教の樣に別段むづかしい神や、佛があるでもなく、また面倒なる修行の必要もなく、唯、花鳥風月其他を弄してさへ居れば自然に面白味を感じて前にも云ふ如く多少の洒脫餘裕を生じ來るのである。其結果は人生上に多大の影響を與へて、吝嗇、野卑、殘酷、狹隘、不人情といふ樣な人性の惡的方面が、多少救はるゝ事が出來樣と思ふ。されば如何に俳句の實業上に効益あるかは想像に餘りあると信ずるのである。

そこで俳句は斯る効益あるものゆゑ、何人が之れを弄するも決して何等の差支なきと共に、俳句の風の雅俗高卑も固より問ふ處でない。これ等は

其弄せらるゝものに任せて、其人の性に適へばよいのである。それ故俳句は、人間として一種の人間を離れた觀察を遂げて、それをおもしろく、をかしく咏ずるのである。假令人事の上に於ても花、鳥、風、月等の天然に對すると同じく、それを利害得失以外に眺めて諷咏するのである。何と罪のない遊びであるまいか。そして此等の人事風景といふものは、一般の人に對して各々邪念なく感受せらるゝもので、假令、高尙と通俗との區別はあらうとも、其間人間に有する如き黨派的の區別は持たぬ。從つて此等を弄ぶ上に於て、人間の黨派に拘束せらるゝ事はない。如何なる人間の黨派も、此の俳句によつて人事風景の感受が、總て平等的であると同時に、一席に團欒して樂しむ事が出來る。こゝに於て乎、常に敵味方の念や惡感情を持つたものでも、此の俳句を弄する下に立つた瞬間には、確かにそれ

等の觀念を忘却して、其結果は一國民として他國民に對する場合、又一國民としての統一を得る上、或は實業家の協力をなす折、其他政治教育あらゆる方面に對して融和の助けとなるものである。

尤も、簡易淡泊のみが人間に於て決して萬能とは云へぬ、一面には濃厚細密にして一念強く、飽く迄も我が事を成し遂げんとして諸事熱心周到なる氣風も亦持つことが肝要である。只我國民大體の性情が淡泊洒脫であるから、實業家の如き劇務に鞅掌するものは、業務の餘暇時に此洒脫にして餘裕ある十七字を弄せば、心身共に壯快を得て、社會や國家の上に、一面大なる効益があると云ふのである。

かくの如くに論じ來れば、實業と俳句との關係のみでなく、その他あらゆる事業に從事するものと、此の俳句の關係も亦思ひ半ばに過ぎん。返す

返すも余は敢て俳句萬能主義を唱へるではない、唯俳句の側の効益を擧ぐれば此の通りといふに過ぎぬのである。

作句上の思考法

同じく文藝上の作品でも、長い詩形を有するものなら、思考の方法といふやうなものもあらうが、俳句は僅かに十七字の短詩形で、これを作るにも多くは即興でやるのだから、餘りに多く思考を要せないやうだ。といつて勿論全然思考を要せないことはない。詩形の短い丈それ丈特別な思考を要することもある。尤も頭腦の中ではやつて居る筈だが、それが慥かにあしようかうしようと意識してやつて居るのではないから、俳句を作るに

は斯ういふ思考の方法があるのだと明言する事は出來ぬ、思考はあるとしても、恐らくはその方法といふものでは無いかも知らぬ。

謂はゞでたらめに思考して、その中に趣を備へたものが宜い俳句となり、趣の無かつたものは拙い俳句となるのだ。

砲術などは非常に進歩して、目的物を直接に見て居ずとも間接にその距離を測つて打ち出し、そして決して外れぬ迄に至つて居るさうだが、若し俳句にもそんな方法があれば、誰れでもそれを學ぶだらう。學び得てその方法でさへ行けば、常に宜い句が得られる譯だ。が勿論その事のあらう筈のないのは、今更いふまでもあるまい、というて了つたのでは、何もおはなしにならん事になる。で俳句を作る上に、頭腦を使ふことに就て、自分の經驗やら初學者の注意やらを少しく述べて見よう。

俳句を學ぶには、先づ俳句の趣味を解さなければならぬ。一體日本人の趣味といふのは主として淡泊である。これが殊に日本に俳句の樣なものが發達した所以であらう。外の我が文藝の作品は、大分外國人にも趣味を解されて居る樣だが、俳句となるとそれがまだ解されない、つまり俳句の詩形が餘りに小さいからであらう。が、何れの國にも俚言とか格言とかいふものがある。そして一般の場合には、長い議論文よりも、一層鋭い印象を讀者に與へつゝある事は事實だ。とすれば、理窟と趣味との相違こそあれ、外國人にも、短い俳句が解されない事もなからう。現に近頃はちよい〳〵外國人にも俳句の研究をやつて居るものがある樣に聽いて居る。これは少し問題外に走つたが、兎に角、俳句を學ぶものにとつて最初に肝要な事は趣味を解するのだ。けれどもこの趣味を解するといふが又、容易の事では

ないので、初學者は先輩の句集や評釋書か何かに依つて味ふ樣にするのが得策だらうと思ふ。

着想上の思考

俳句は、詩の中でも殊に詩形が小さくて修辭の窮屈（といふと語弊があるが）なものだ。即ち僅に十七字を以て綴らねばならぬのだから、從つてこれを作る材料の選擇又着想上に十分注意しなければならぬ。勿論詩である以上、何を歌ひ、何を詠じても差支はない譯であるが、何ものを捉へ來つても十七字中に收めて、朗々詠ずべきことを得る樣になるまでには、餘程の修養をつまねばならぬ。

そこで俳句に相應はしい想を捉へて來るのだ。が、それはどういふ想が宜

いのかと聞かれては殆んど返答にこまるが、要するに前に云つた趣味を解すれば段々と想を選擇する見識も出來るし、從て材料の取捨も自由に出來るものだと心得て置くが可い。けれども、着想に就て殊に注意して置かねばならぬ事は、初學者は什麼しても理窟に流れ易い。一體詩は決して理窟でないのだからこの點は、大いに戒めねばならぬ。

修辭上の思考

着想が出來れば、次に來るものは修辭だ。俳句は短い詩形である丈、修辭が殊に六ケ敷い。是もいかにといふ思考の方法はなからう、われはどうして居るかと聽かれると、矢張り無意識にして居るのだといふ外はない。が注意すべき事は、初學者は殊更に奇拔な修辭をしようとして、下らぬ頭

腦を使ふ事をする。これは益もない事だ。斯界の老手とでもなれば、自然奇拔な面白い修辭が出て來るので、殊更に奇拔を望む樣では趣きある句は得られない。却て失敗を取るのである。初學者は容易く名句を得られぬ、又得られぬのが當然の事なのだから、徒らに大を望まず、兎に角に、自己の着想を完全に言ひ現はす事に思考を注いだ方が宜からう。

修辭の事で殊に考ふべきは、想との調和である、トンチンカンになつてはいかぬ。想の優しいものは優しく、想の悠長なものは悠長に、想の勁拔は勁拔に、常に兩者の調和といふ事を思考せねばならぬ。

模倣上の注意

何れの藝術に入るものでも必らず一度は踏み入る可き階段がある、それ

は古人先輩の模倣で、或る境に達するまでの修養としては止むを得ない、否却つて力む可き所であらう。

が茲に注意すべきは、この摸倣も、或る境に達する迄で、いつまでも〳〵模倣に執着して、所謂糟糠を舐るものとなつて仕舞つてはならぬことである。

短詩形を忘るる勿れ

前にも謂うたが、俳句は十七字に限られた——時としては破格もあるが——短詩形である。で句作する時には常にこの「短詩形」といふ事を心に置いてかゝらねばならぬ。初心の人には、あれも言はうこれも入れようとする餘り、短詩形には相應しからぬものが十七字の間に雜然として陳列され、

何等の趣もないものになつて了ふ弊がある。丁度俳句は一升だきの釜の樣なもので、外の長い詩形のものは五升だき八升だきであらう。一升だきの釜に一升五合も二升も入れては、美味い飯の出來ようは筈がない。

俳句に用ゐる辭もさうだ、無暗といろ〳〵の辭を集めてはよしや十七字の中に入れられたとしても、混亂撞着たるものになつて仕舞ふ。短詩形にふさはしい、精練な、又要領を得た辭を撰まねばならぬ、それには是非注意しなければならぬのは、歌はんとする想の要點を捉へた一二の言語だ。

俳句は短詩形であるが故に、想の悉くを言ひ盡さるゝといふ事は出來ぬ。そこが俳句の俳句たる生命のある處で、即ち餘情餘韻を含めるのである。餘情餘韻といふものがなかつたなら、俳句の生命の殆んど大部分を失ふであらう、初學者は想を悉く言はんとするので、此餘情餘韻を殺ぐものが多

い、こゝもよく思考せねばならぬ。

句作と興

何れの藝術作品でも、作者の興の乘つて居らぬものに好いものは無いといつても宜からう。が俳句は殊にさうだ。先きにも言つたやうに、思考といふよりは即興が主となつて居る位であるから、興の乘つた時には、種々な苦心をせずとも、想も好いものを得られ、辭も好いものを捉へ得るが、この興の去つた時にはどれ程苦心しても、うまいものが出來ない。うまいものゝ出來ぬはまだしも、何も出て來ない事が多い。われは斯ういふ時には、氣を轉じて一時それをやめて居るのが常だ、何事を考へるにせよ、澁滯しては名案の立つものであるまいと思ふ。

それから、自分は酒を飲むと興が湧いて來る。醉興陶然たる時には、句が逃る樣に出て來る事がある。さういふ時の句は比較的好い樣だが、これには危險なことがある。といふのは醉うた時に至極巧いものと思うて人に示した句が、さめて後から見ると愚にもつかないものである事などは往々ある失敗の一つだ。

俳句の詩形に就て

俳句の詩形の既往に屬する事と將來は何うであらうかといふ事に就てお話をする。

俳句は申すまでもなく、十七字の五七五といふ調子を以て成り立つて居

る。これは誰もが知る如く、連俳の發句を引きはなして來たものであつて、連俳は連歌から出て來たもので、又連歌の發句と脇句等は、かの三十一文字の和歌から來たのである事は、今申すまでもない。それで和歌は既に神代からあつたものであるが、それは字數や調子なども一定して居ないで、詩形の大小、字句の長短など樣々であつたが、彼の素盞嗚尊の詠じられたといひ傳へられる「八雲立つ」の三十一文字が出來てから、その詩形や調子が他よりも勝る所があつたものか、其後は殆ど一般にこの五七五七七の形を用ゐるやうになつた。その後も詩形には、長いのがあつたが、何れも調子は七五とか五七とかのものとなつて、その以上に於ては多く變化が出來ない、結局三十一文字が、最も勢力を得て、益々人の口と耳になじんで來たのである。

されば七五又五七といふ調子は、我が國民が、神代以來、漸次口に言ひなれ、それを聞けば自然に感覺も深く又思想も述べ易く、吾れ人ともに一種の趣味を感じるやうになつて居るので、我が國民が、我が國の言語に一の調子をつけて言ふ時には、知らず識らずこの七五又は五七といふ調子になる。例へば赤んぼあがりの子供が、何か節をつけて、出放題の歌を唄ふにも、多く七五の調子に自然となつて居る。といふ風に國民の總てが、今日では先天的にこの調子に面白味を感じるやうになつて居る。それといふのは、祖先幾代となくこの調子を言ひなれ聞きなれて來たからであらう。

で、わが俳句も、この調子を承けて形成せられて居る以上、國民的の詩の一つとしては、この五七五の十七字形式は永く保存されなければならず、又保存さるゝであらうと信ずる。然しながら、既往に於ても和歌などに他

の變調のものがあつたのであるから、俳句にも今日の詩形調子に一時性の變化がないとはいはれぬ。けれども、それはほんの一時で、大勢大體に於ては、この五七五の調を捨てる事は出來ん。嘗てこの俳句が、談林風から、芭蕉の正風に改まるまでの間に、虛栗調といふのが出來たことがある。この調は五七五を亂して、字數も多くし、種々のつゞり方をし、恰も五言七言の漢詩の一二句へ日本の訓をぼどこして讀んだかの如き變調のもので、流石に新奇を好む人心には、多少珍らしがつて一時歡迎されて、芭蕉をはじめ其角嵐雪なども競つて遣つたものであつたが、こんなものは本來國民の口と耳とになじんで居ない、又なじみ難い調子であつた爲めに、忽ちの間に消滅して了つて、正風の調子に統一されてしまつた。その後かゝる變調のものもなかつたが、百年程も經てから、麥水といふ人が出て、又この

虚栗調を始めて、その時には、有名な蕪村なども唱和した事であつたが、麥水といふ人が、芭蕉あたりの如き大家でなかつたので、旁々その勢力も微々たるもので終にいつとなく姿を失つてしまつた、『新虚栗集』といふ著書もあつたのだが、それすら今多く傳はつては居ない。

輓近正岡子規が俳句の刷新をして、今日我々の俳風が起つた以後も、碧梧桐と虚子とが、郷里松山から出て來て年少氣鋭の勢に任せて、何か變つた新らしい調を試みようと計つて、虚栗に似たやうな十七字以上の長いものや、又十七字中で五七五の調を變じて種々な事をやつても見たが、この時に二人は五七五の調はもう聞くも陳腐で胸がわるいなぞといつた。

——これとても暫らくにして自分から止めてしまつて、やはり今日のやうに五七五調に返つてしまつた。

右等の例から推して將來を考へて見ても、やはり既往にあつた如き變調のものが時々起るかも知れないが、俳句が我が國民の詩の一つであるからは、我國の言語が變更せざる限り、この詩形と調子は決して、變化すべきものでなく、換言すれば、五七五の調を用ゐて居る俳句の運命は、國家と共に永久であるといつてもいゝのだ。

畢竟詩が、我れ人の思想を述べるものである以上、如何にしてその感想がよく誰にも發揮され、又人にも感通するかといふのが目的である以上、それには互に言ひなれ、聞きなれた調子を用ふるといふのが適當である。それであるのに、一時の好奇心より只形ばかりを見て、直ちに陳腐としてしまふといふのは大なる間違である。外形が如何に新しくとも、内容が陳腐なものでは駄目である。要するに内容の陳腐を避けて新しき思想を求む

れば詩は千變萬化して、趣味は無盡藏である。それを、餘りに新奇を求めんとする極、時として詩形までをも變へなければならぬものと思ふのであるけれども、それは終に勞して功なきにをはるのである。

所でかういふ論者がある、世界が開けて來るに從つて、交通も頻繁になり、學問も進歩して行く、それにつれて人の思想もます〳〵複雜になつて、詩歌も從來のものでは、餘り簡單な形で、到底複雜な思想を表す事が出來ない、その點から、或は變化して行くだらうと、これは勿論あり得べき事實である。がそれ等の爲めには、昔の長歌の外、今日では新體詩といふものも出來て居るから、それを以て、いくら複雜な思想でも、いくら長い文字でも綴つても行かれる。この詩形でその用には十分である、なにもこれまでの俳句や三十一文字の和歌を變更してまで、その用に當てるには及ば

ないのみならず、如何に複雜な思想でも、既に詩歌として詠ふ以上、互の感想を通ずる以上、反つて或る要部の切實な意味を表はす場合には、簡單な詩形を以てする方が、千萬言を費やしたものよりも、人をして感動せしむることがある。一朴訥の老人の、言葉短な訓戒が、辯士が壇上に起つて、懸河の辯を振ふよりも、人を眞底から感動せしむるといふが如き例はいくらもある。これを以て見ても、永い詩形よりも、短い詩形の方が、或る場合にはより多くの功を奏するといふ事が分らう。又世が複雜になればなるほど、時としては簡易淡薄の趣味で以て氣を轉じて慰藉するの必要も生ずる。濃厚の飲食のあとで茶漬に香の物を求め、金殿玉樓に住んで居る人が田舍の茅屋竹籬を珍しがるのもその一例である。此點からも簡單な詩形調子の長詩形と共に兩存すべき理がある。その含蓄とか餘韻餘情とかいふも

のは短詩形の特長である。さすれば如何に世が複雜になつても、長い詩形や變體の詩形が出來たりとも、俳句は俳句として存立するものであるといふ事は毫も疑ひがない。

又ある突飛な論者は、國民の今までの言語を捨てゝ英語にしろといふ論が行はれて居るが、さうなれば俳句は不用なものになるであらう、といふかも知れぬ、然し十七字の如き短い詩形で詠ふ詩が、我が俳句の外にあるであらうか、どうか、世界を通じての文學史上、今日までの處には決してない。そしてこの短い詩が、よく或る切實な感想を人に與ふるといふ事も人の心理上の事實で、世界に通じて其功を同じうすべきものである。さすれば、萬が一つ國語が英語に變ぜられる事があるとしても、英語の上に於てもかゝる詩形が發見せられなければならぬ。これは詩歌ではないけれど

も、智識に屬する格言などにはかなり短いものが何れの國にもあるから、詩歌といへども作れぬことはなからう。つまり此の如き短詩形の今までないのは彼等の國々の缺點であるのだ。

況や我が國語が、そんな事になるべき筈はないし、國と共に永久存在する以上、その國語と調和して感想の或るものを最もよく發表する所の俳句の將來は、もはや喋々といふの要を認めない。これは少し話が違ふが、豐太閤が朝鮮から大明まで攻め込まうとした時に、或る人が支那語の通辯を伴れて行かうといつたのを、豐公は烈火の如く怒つて、今後は朝鮮であれ唐土であれ我國の言語を使はせて行く考へであるから、通辯などは無用の沙汰であると喝破したといふ話がある。國民の意氣が常にかうであつたら、我が國語を以て世界の語として、現今英語の廣く用ひられて居るやうに、

至る所に用ゐられるやうにと務むべき筈である。何も卑屈に國語を英語に變更する必要はあるまい。さすれば國民の意氣からいつて世界唯一のこの俳句の詩形俳句の調子を永く存せしめて、萬歳を謳はねばならぬ譯ではないか。

世界に唯一なる俳句

俳句は何を目的とするかと云ふと世間に種々の說がある。何れも一理あるものであるが、われをして言はしむれば俳句は娛樂慰藉である。碎いて曰へば道樂である。道樂と云ふと何か卑しき事の樣に聞ゆるが、博奕や傾城買の道樂と違つて俳句の道樂には價値がある。一體道樂なるものは何

であるかと云へば各々の苦悶を排却するが爲に生活の餘裕を作つて娛樂をなし精神を慰藉するのである。人は衣食住なしでは生活する事が出來ない。衣食住を求むる爲には終にはさま〳〵の有形的無形的の苦悶が出來て來る。苦悶は貴賤貧富凡ての人に亘つて皆それぞれの境遇に應じて、自己の慾望と比較して起つて來る。此苦悶を排却する事が出來れば社會に活動するのは容易である。さて其娛樂慰藉も人によつて千差萬別である。先づ文學は其一つである。文學にもいろ〳〵あるが俳句の如き短詩形なものは咄嗟に出來るからして即座に樂しむ事が出來る。此點に於て俳句は娛樂慰藉に最も適して居る。最も娛樂慰藉に適して居るものは最も苦悶を排却するによい。最も苦悶を排却するによいものは最も人間を活動させるものである。俳句道樂の價値豈大ならずやである。

次に俳句の内容であるが、俳句は何をするのであるかと云ふと、美を歌ふのである。美的趣味を樂しむのである。茲で一つの問題が起る、今俳壇に於て盛んに云はれて居る事は陳腐と云ふ事と斬新と云ふ事である。之に就てわれの意見をお話しよう。よく人が云ふには是は陳腐である、此句は何處かにありさうである。古くさい、と是がわれの甚だ解せぬ所である。何故古いのはいかぬのか。既に俳句は美を歌ふのである。美である以上古いからいかぬと云ふ譯はない、美不美と云ふことと古い新しいといふことは別である。古いのにも新しいのにも共に美がある。若し古いのをいかぬとすれば、俳句は美の一部を失はねばならぬ。併し俳句は詩であるから創作でなければならぬ。眞似をしたのではいかぬ。趣向を變へねばいかぬ。趣向さへ變つたら美を歌ふに何の差支もない、中には此趣向は古いなどと

云ふ人がある。然らばそれと同じ句がどこにあつたかと尋ねて見るとそれがないのである。趣向の變化は古い内にも出來る。それを單に古いと云つて排斥されては堪らぬ。

次には斬新であるが、單に新らしくさへあれば何でもよいとするならばわれ大に攻擊せねばならん。古いと不美とは別である如く新しいと美も亦別である。如何に新しい女房が好いと云つても醜婦を娶るものはないと同じて、新しいと云ふは結構であるが美を伴はねばいかぬ。

次に又斯んな說がある。世界は日々推移する。俳句も亦伴つて進まねばならぬ。今日以後の俳句は將來人心の趨く所を察して、獨り花鳥風月を歌つたり洒脫淡泊な人事を詠ずるに止めず、更に深く人心の機微に立ち入つて大に人生に觸れねばいかぬ、と云ふ。是もわれには異論がある。前にも

云ふ如く俳句は美を歌つて自己の樂みをするのである。そして苦悶を排却するのである。自己が樂しむと同時に自己と等しい者にも示して其樂を分つのである。既に自己が樂しむのである以上、世間がどう推移せうが關する所でない。將來若し今の俳趣味が樂しくなくなつたら又其時の人が何とかするであらう。

併し句風の方面を開拓すると云ふことは大によろしい事で、句風の開拓は即ち美の開拓である。美の範圍は無疆である。之を開拓して行くのは俳人の務めであつて、又娯樂慰藉の上に効のある事である。であるからして諸君の如きお若い元氣の旺んな方はどし〴〵句風の開拓に從事なさるがよろしい。併し開拓が結構であるからと云つて以前の句風の方面をいけないものとは云はれぬ。田地で云つても開墾した田地ばかり耕して在來の田地

を荒らす者があつたら大馬鹿者である。であるから在來の方面に甘んじる方々もやはりなくてはならぬ。

併し茲に特に注意したいのは開拓に從ふものは兎角開拓に急いでならぬ。どうも開拓しよう〳〵とあせる爲に、何でも珍らしい事を云つて見たくて堪らぬ。むづかしい事を云つて見たくて堪らぬ。そこで自分でも譯の分らぬ樣な變てこな句風を始める人もあるやうであるが、是は甚だ宜敷ない。元來句風の開拓と云ふ事はつまり美の擴張といふ事である。唯開拓さへすれば美はどうでもよいとは餘り亂暴な話である。恰かも田地を開墾する場合に開墾さへすれば稻は出來まいが桑は育つまいが搆はぬと云ふ如く甚だ感服せぬ事である。次には舊派とか月並とか云つて攻擊する人がある。子規なども隨分月並攻擊を盛んにやつたが、あれは明治の新俳句を鼓吹す

る爲めの佛家に所謂方便である。日蓮が法華を弘める爲めに他の諸宗を天魔國賊と罵つたと同じである。現にわれに向つて、我村は我地方は皆月並である新俳句に遊ぶは自分一人である自分は是等の月並連をして明治の新俳句の光に浴せしめねばならぬ、どうか聲援して貰ひ度いなどゝ通信して來るものもあるが、今日の如く全國に明治新俳句の行き渡つた場合に何も月並のお世話を燒くには及ばぬ。其人達がそれで娯樂となり慰藉される事が出來るなら結構ではないか。今日の吾人は決してそんな人の疝氣を頭痛にやむには及ばぬのである。

さて前にも云つたが俳句の短詩形なる事是は日本の人の特長の發揮された產物であつて他の諸外國何れにも類がない事である。一體西洋人は歷史上にも極濃厚な粘着したねつい氣風である事が現はれて居る。日本人は之

に反して實に淡白である洒脫的である頓悟的であるから、西洋人に比すると速に苦悶を排却して仕舞ふ事が出來る。西洋人の如き粘着した性質では中々容易に苦悶を排却する事は出來ない。日本人の特長は全く此淡白な所洒脫的な所頓悟的な所にある。大和魂と云ふ樣な事も畢竟此淡白な洒脫的な頓悟的な所から起つて來たのだ。して見れば俳句は即ち大和魂の產物である。日本が露西亞と戰爭に勝つたのは俳句が與つて力ありと云つても宜しい。

之を要するに俳句は娯樂慰藉であつて爲めに苦悶を排却する。諸君は此世界に唯一なる俳句によつて苦悶を排却し社會に活動せらるゝのである。是は實に諸君の幸福と云はねばならぬ。どうぞ此幸福なる俳句を益々開拓せられて全世界に其特長を發揮して頂きたい。

俳句の本領

我が國の俳句の如く誰にでも作れる詩といふものは外の國にない。詩を作るとなれば大概詩人と云ふものがあつて、實業家なり學者なり其他凡ての人が詩を作つてゐる譯ではない。支那などでは此頃まで詩を作るのは官に就く一つの方便のやうになつてゐたし、西洋でも詩を作る人は特別の學者であつて、讀む人は普通にあるが誰でも作ると云ふ譯ではない、之れに比すると我國の俳句の如きは非常に作者の範圍が廣い。學者は勿論のこと、政治家なり、實業家なり、農夫なりが能く俳句を作つてゐる。又男子のみでなく、女子も作れば、中學小學時代の少年も作る。

昔平安朝時代は總ての人が和歌を讀んで、田夫野人の間までも普及されてゐたが、其和歌よりも俳句は一層普及してゐる。作る所の者には高尚なのもあれば卑俗なのもあり、或は何派などと別れてゐるが、兎に角銘々の思想を述べ感情を慰めてゐる。要するに詩は必ずしも作らずとも可いものであるが、作ることが出來るなら誰でも作りたい。我が感情をたゞの言葉で述べるよりも詩で歌ふ方が能く貫徹して、自分にも面白く聽く方でも愉快なものである。又善く出來れば面白い上に隨分名譽を博することゝもなるのである。故にならうことなら廣き範圍に於て誰れにも作らしたいものである。且つ人間の社會觀から云つても詩を作れば何處か少しの裕取が付く、人間の社會を機械に見れば即ち詩は油とでも云ふべきものであつて、爲めに其社會が圓滿に活動さるゝのである。して見れば俳句の如く誰にで

も作れる詩をもつ我國は幸福であつて、我が國以外の國人は不幸である。

從つて吾々は他國に大に誇らねばならぬ譯ではないか。

斯う云ふと或は十七字の僅の文字で現した感情趣味は高の知れたもので、文學の上から見れば價値がなく他國に誇るほどのものでないと云ふかも知れぬが、物には長短大小各々の用がある。寸鐵人を殺す的の美を歌ふが上に、誰にも即席に出來ると云ふやうな重寶な詩も文學中一つ位あつても可からう、否、必ずなければならぬものである、且つ日本人は俳句のみを作つてゐるのではない。小說も作れば和歌も作り、又新體詩も作つてゐて而して俳句を作つてゐるのである。俳句だけ他の國よりも我國の方に詩が多いのであるから、どこまでも大いに誇るべき譯で、今後は彼等に於ても我に學ぶべきものである。是れが俳句の本領で又今日及び將來に在在すべき生命のある處である。

俳句の將來

俳句は將來どう發展するものであるかと問ふ人があるが、此發展といふ意味がまだ不定のやうである。われは俳句の目的は美を歌ふものと定めて居る。で、美を最ともうまく、面白く歌ふと言ふことは、早や既に元祿の芭蕉等に於ても十分にやつて居る。殊に天明の蕪村の如きは此點に於て天才を擅にして居る。明治になつても子規を始め今日大家諸子といはゝ人はそれ〳〵に造詣を示して居る。從て此上それよりも勝れて美を歌ふ餘地はないと思ふ。で、かく美を歌ふのを發展とすれば、俳句は將來に發展

の地を餘さないともいへる。

併し同じく美を歌ふといふ上にも人にはそれ〳〵の風がある、それ〴〵の傾向がある。此點は千差萬別であつて、元祿にもそれが現はれて居た。天明にも現はれた。明治には元祿にも天明にもなかつたものが現はれた。

して見れば傾向に於ては新しく現はすべき方面が數々あるであらう。之をやつて行くのを發展といへば、發展の餘地はまだ〳〵ある譯である。

再言すると、俳句を深く、高く發展させるといふ點に於ては發展の餘地はないが、横幅を廣く、方面を多くするといふことを發展といへば、十分其餘地がある。即ち人々の句風、句調がそれである。既に句風、句調といへば一を是とし他を非とすることが出來ない。高低深淺には甲乙が言はれるが、句風、句調には優劣を論ぜられない。けれども文藝其物の務として

唯人の眞似許りをして居るべきものではなく、出來る限り各々自己の面目を發揮せねばならぬ。其爲にこれ迄にない方面を見出してそれに力を逞しうすることが將來發展すべき途に外ならぬ。

そこで此新方面を開くに一の要訣がある。元來俳句の詩形は僅に十七字であるから、此の十七字は十七字の働き以上に働くことの出來ないものであるといふことを考へて置くのである。又美を歌ふものは俳句のみではなく其他にも長い形式を有つ詩もあり、千百言を費す散文の文章もある。而して目的は皆同じく美を歌ふといふことにあるのであつて、長いものには長い長所があり、短いものには短い長所があるから、各々分を守つて其長所を發揮しつゝ美を歌はねばならぬ。

處が俳句以外の詩や其他の文學が長詩形や、字數の多きを利用して千變

萬化に其美を歌ひつゝある今日であるから、動もすると俳句を作るものも、それに皷舞されて、遂に其眞似がしたくなり、十七字の短詩形の本分を忘れてそれ以上の美を歌はうとするけれど元來十七字の働きには制限があるから、遂には無理な言語を用ゐ、木に竹繼いだやうな事を歌ひ、自分にのみ解つて、人には讀みにくゝ解り難いものとなつて、結局美を歌はうとして却て其美に少からぬ障碍を生ずるやうになる。これは若い熱情の人々にはあり勝の過である。けれども既に十七字を以て一の文學を樂しむといふことに意を定めたならば、何も左樣に無理な努力をする必要はない。退いて徐かに十七字詩の本分を守り、其長所たる美を歌へばよいのである。而して猶餘力あらば十七字詩以外の長詩形や散文に活動すればよいのである。かくて長短各々其所を得て、始めて作者の力も遺憾なく逞しうされ、

價ある文學を夫々に打立てる事が出來るのであると思ふ。

譬へば飯を炊くには大釜もあれば、一升や五合、三合を炊く小い釜もあつて、それ〴〵適當に用を達して居る。然るに小さな釜が、大きな釜で澤山の米を炊くのを羨ましく思つて、分量以上を炊けば、結局出來損ひの飯となつて味のまづいものとなる。これと同じ事で、十七字の短詩形が濫りに複雜な事をいはとうすれば、矢張り不出來な句となり拙いものとなつて、勞して効ない事になるのである。此外、從來の句風、句調を一概に陳腐とし、之れを學ぶは今日の俳人としてあるまじきことのやうに云ひ做すものもあるがこれ亦大なる間違ひで、元祿天明以來開かれた俳句の田地は今も猶俳人の培ふべき田地たるを失はない。ただ要はそれ〴〵好む處に隨つて其美を收穫すべきであつて、徒らに他を排し、他を蔑視するは俳人たるも

の丶雅量でない。假令句風、句調は己れと異つてゐるものでも、其の美を歌ふ點又各の長所は十分に之を認めて、偏頗に流るゝことなく、新舊古今相與に將來の發展を期したいものである。

俳趣味と家庭

俳趣味といふことは世間で解つて居る樣で其實解つてゐない。これが定義を明確に述べたものも餘り見受けぬが、要するに、俳句は美を歌ふ文學の一部であつて其目的は人間の慰藉娯樂に外ならぬ。而して、それが詩形そのものゝ必然の約束として同じ文學の上に於ても一種の傾を有つて居る。美に對する主觀若くは客觀の描寫であることは、他の文學と同樣であ

るが、其內容が複雜ならずして簡單に、緻密ならずして疎放に、濃厚ならずして平淡に、熱烈ならずして冷靜であるといふ點は確に俳句の特長である。だから人生の煩悶を寫すといふ樣な面倒は避けて、可成人間を超越した、脫離した趣を寫し出す。さればといつて全然人間を忘れては了はぬ。人間に同情を寄せるが、自他を客觀に置き、作者が第三者となつて觀察して居るから、何事にも洒々落々として餘裕がある。非常に熱した人情を歌つて人を感動させたり、社會に同情を求めたりするよりも、寧ろこれによつて煩悶を慰し、逆境に處して一部の寬容と慰安とを得るに適したものが即ち俳句である。隨つて之を家庭に入れて多大の効力がある。如何に親しい親子兄弟夫婦の間柄であつても時に感情の衝突は免れない。さういふ場合之を救ふには宗教だの道德だのがある。けれども其等は教師とか學者と

かを要することで家々人毎には望まれない、又他に娯樂の設備をしようとすればそれだけの金がかゝる。處が俳句はそれらと違つて、何れの家、何れの人にも用ゐられて、感情を和げ、社交を溫めることが出來る。殊に和歌や漢詩のやうに文法だの雅言だのに拘束されることが尠いから、誰にも容易く作れるといふ一得がある。其證據には古から士農工商都會村落津々浦々に至るまでも行はれてゐる。既にこれよりやゝむづかしい和歌が男女の中を和らげ、猛き武士の心を慰め、鬼神さへも泣かしめたといふならば、今日俳句の上にても左樣いふ感化は必ずあらうと思ふ。さて之を歌ふ內容についていへば、もとより雅俗の區別、優劣巧拙もある事であるが、これは藝術上から價値を定める場合に論ずべきことで、家庭の上からいふ時は必ずしも藝術的でなくてもよい。其一家其人々の好みに適したことを內容

としたらばよからうと思ふ。

俳句と宗教

俳句と宗教との關係をお話するには、先づ宗教と云ふ事の意義が定まらねばならぬ。今日普通宗教と稱へて居るのは、人各己が歸仰すべき方向を定め、それに向つて安らけく此世を送る、一言にして云へば安心立命を得ると云ふ事なのである。而して其歸仰上には神を崇拜するのもあれば、佛若くは佛說を信仰するのもあり、其他下つて種々な偶像から狐とか蛇とかのやうな動物を尊崇するものもあつて、其區別差等は樣々あるけれども、要するに人々の安心立命の爲めで、人間の人間たる道を天則的に行はしむ

るやうにする目的に至つては變らぬ。

處が俳句と云ふものゝ如きは、人生など云ふ謹厳なる問題より見れば唯其生活中の一事件で、而も治外法權的のものである。勿論人の言行と關係はしてをるけれども、別に是れが人たる道とか、必ず行ふべき筋とか云ふべきものではない。

人間の世に處する間只義務的の勤務に服して孜々として一の寛ぎもなしと云ふのみでは、決して精神も身體も續くものではない。其處で之を慰籍するの必要が生じ、全く人間の羈絆をはなれて、純然たる美を樂しむ、自由自在に美の天地に翱翔して、我は人間なのか、神佛なのか、或は又獸なのか草木なのか、それ等の總てを忘却して了つて、甚しきは我なるものをさへ意識しないと云ふことになる。人が此世界に入ればもはや現世界のも

のでなく、形は現世界にあつても心靈は遠く美はしい面白い別世界のものである。

されば俳句を作るに當つても、我れの人間たる事、我れと人との關係、あらゆる世俗の事情を忘れて了はねばならぬ。故に人を人としての安心立命を云ふする宗教などとは一切關係を有せず、全く緣のはなれたものである。純然たる文學系統の俳句を樂しむ時に當つては、獨立自在俗事には何等の顧慮する處なく、或は天地の外にも身を置いて歌謠するのである。

目前の例を以て云へば、彼の窓外の桃の花や櫻の花を見てあゝ立派だ美しいと、其美にうたれた瞬間は、もはや自ら人間なのか、獸なのか、將た如何なる勤務をすべき身であるとか、そんな事は全く忘れて了ふのである。而して一首詠じようとか、一句唸らうとか云ふ氣になるのも此忘却の結果

なのだ。

若しも俳句を作るに當つて、今晩の飯の事とか、酒代を拂ふ才覺とか、其他の事を一々考へ煩うて居たなら、とても十七字は面白く綴れぬ。綴れても十分に伸びぬ。第一俗事に齷齪してる心であつては、什麼して恍惚無我の境に立つ事が出來よう。

既に我を忘れて了ふべき文學の天地には、善とか惡とかそんな束縛を受くべき道理はない、恰も庭前の胡蝶が舞ふ如く、森の鳥が鳴く如く、人は美の世界に舞ひ、歌ふのが俳句、俳句のみに限らず和歌とか漢詩とか種々な純文學となつて現はれるのである。

純文學系統の俳句は右に述べた通りであるが、若し之れを他に應用して、人心を修めやう、國家の爲めに或主義を主張しようとか、又自分が信ずる

宗教を擴めようとかする場合には、種々の傾向した俳句が出來る。がこれは文學と云ふ範圍を離れたもので、少くとも純文學と云ふものではない。

古來往々にして俳句に禪味が含まれて居るとか宗教を謳歌して居るとか、倫理道德の主義を重んじて作らねばならぬとか心得て居るものもあるやうだけれども、此れは本來の目的を遺却し、一時の應用に眼を取られたものである。

然らば純文學の俳句には宗教界などの事件は一切詠み込まれぬかと云ふに、決してさうではない。古より地獄、極樂、天道、惡魔とあらゆる宗教の事を詠みこんであるものは少くない。がこれは唯美をうたふ材料に用ゐたばかりで、俳句は世の中の森羅萬象、何事を詠じようが、何物を捉へようが、聊かも他の束縛を受けないのだから、宗教界などの事件を材料に取

つたからとて決して不思議はない。總てが其美を謳ふと云ふ目的に外ならぬのである。

材料はよし宗教であらうが、道德倫理であらうが、俳句に於ては美化して了つて、本來ならば、善惡正邪を論じ、世道人心の如何を云々すべきものも、唯美を見るばかりである。此に於て倫理も倫理でない宗教も宗教でない。乃至政事も法律も皆然りである。

斯く云ふと又俳句なるものは世道人心を亂し、國家社會の爲め危險極まるものではなからうか。との問題が起りさうであるが、よく考へると決してそんな事はある筈がない。

第一、俳句を作る時は、鳥の囀りや蝶の舞ふ時の如く唯だ自由に何等の束縛も受けないにしても、人と云ふものは生れて社會の一員となり、互に

助け合うて生活する動物なる以上は、世道を亂し人心を害する樣な事を美と感ずる筈がない。若し感するとすれば、それは既に人間たる頭腦を失つたもので即ち人面獸心なのだ。

他の例を以て云へば、糞は唯見れば穢い。而して直ちに之れを繪に現はし、句に捉へたとて不快感を起させるばかりで、到底美を味はせる事は出來ない。されど此れに種々配合の妙を盡し糞を詠み込んで糞と云ふ事を忘れさせる程の手段を經たならば本來の穢いものも美となるのである。其他忌はしき蛇、恐ろしき妖怪、此等を唯寫した丈では、忌はしい、恐しいの外には何等の趣味も美もないが、或る工夫を凝らせば、蛇の忌はしきも、妖怪の恐しさも打消されて、美趣を得る事が出來る。

惡人とか善人とかを詠じたにしろ、若し讀者をしてあゝ是れは惡が詠ま

れてをるとか、善が描かれてをるとか其のみ氣付かれるやうでは不可ぬ。假りに石川五右衛門と楠正成を謳うた場合にしても、石川は惡人だ、楠は忠臣だとの感じを起させる事よりも、彼等が行動又彼等と他との關係上惡にまれ、善にまれ如何にも美的であると感じさせて然る後文學の能事が終るので、善惡の感をのみ讀者に與へるやうではまだ〳〵技倆が足らぬと云はねばならぬ。

右の次第であるから俳句のみならず、凡て文學其物には世道人心に妨げある道理はないと云ふことも分るであらう。

加之、俳句は最も詩形の簡單なものであるが上に、餘り複雜な人事を詠じないから、此點に於ても世道に害を及ぼす事は少い。

和歌、漢詩、新體詩、小說と形式が次第に長くなるにつれ、其内にうたはる〻人事も次第に複雜になつて、美感を與ふべき目的のものも、惡人を寫せる處では惡人に同情し、慘酷の事淫猥の事にもそれ〳〵同化を爲すと云ふが如く、案外にも世道人心に害を及ぼす場合がある。此れ勿論それの目的ではないけれど、技倆の到らぬから起るので、其責は作者が矢張負はねばならぬ。長くなればそれだけ此弊害も伴ひ勝ちであるから、別して小說の著作などはよく〳〵自分の手腕を顧みて、必らず善惡其他あらゆるものを美化するの能事を自得し、後初めて筆を執らねばならぬ。左もないと國家を亂し社會を害する大賊と云はれても詮方ない譯だ。それにつけ近來或一派の小說などは此點に於て一歩誤ると危險極まるものであると思ふ。

俳句と新文藝

近來俳句を遣る人が、小說とか寫生文とか、兎角散文の方へ轉じて行く。是れは、俳句と云ふものが、自然及び人事、或はそれ等に對する自己の感情を發表するに、不滿足な形式であるが爲めか、或は、俳句の形式に於て、それ等の一切を十分に發表し得られるものであるか――それに就てわれの觀察は、別にたいして變つたこともない。總て他の學問なり業務なり、各個人の天品、才能と云ふものがあり、更にまた嗜好と云ふものもあつて、それが各自に異つて居るところより、樣々な仕事に從事して行くのであるから、是れまで俳句を作つて居た人が、散文に手を出すと云ふのも、矢張その人の天品が左樣に方面の變り易い傾きを持つて居たので、强ち俳句の

形式が自然、人事、或はそれ等に對する自己の感情を發表するに不自由であるとか、その詩形に不滿足があるとか云ふ爲めではないと思ふ。俳句は僅に十七字、小說や寫生文は何百字何千字でも妨げない。此れと彼れとを比して自己の感情を發表する量の相違あることは最初より知れ切つて居る。知れ切つて居て猶俳句を作るのは、おのづから俳句は、俳句で、一種特別の趣味があつて、小說や寫生文に於ては見ることの出來ぬ長所が存して居るからである。俳し此長所があるからと云つて、いつまでも此長所のみを守つて居るにも及ばぬ。即ち嘗つて俳句を作つたからと云つて、何時までも、俳句を作つて行かなければならぬと云ふ約束もない。或る場合には俳句を止めて散文を作る人も出て來るであらうし、又俳句を作りながら散文を書く人もあるであらうし、これに反して、今まで散文を書いて居た

人が、俳句の方へ手を出して來ることもあらう、嘗て一つのものを遣つたから、他の異つたものに手を出すことが出來ぬ、二つのものは遣られないと云ふものではない。由來文學は自由の天地であるから、その才能が向き、嗜好があり、天品が備つて居れば、何を遣つても一向差支へないことである。のみならず、寧ろ、自己の天品等に依つては、從來遣つて居たことを捨てゝ、他のそれよりも更に自分に適した方面に進んで行くことは、その人に取つて得策でもあるし、且つ文學界に於ても喜ぶべきことであると思ふ。故に俳句を作つて居た人が寫生文や小說に手を出したと云ふことも、全く此の譯で何も不思議はない。

尙ほ悉しく云へば、吾々は、最初俳句のみを僅かの團欒で弄んで居る中に、同好の士がだん〳〵と全國に擴がり、又海外にまで增加して行つたから、それ等と共に益々俳句を作り、俳句を研究して居たのである。ところが俳句を遣る人が多くなるに從つて、それ等〻人々の嗜好や、才能が俳句ばかりに限られて居ない者もあつたから、和歌を作り出す人もあれば、又寫生文を創める人もあり、尙ほ在來の小說に手を出す人も出て來た。けれども、それはその人の才能嗜好に依ることで、敢て怪む可きことではない。俳句以外に嗜好才能を持つて居らぬ者は、依然として俳句にのみ從事して居る。現にわれの如きは、くだらぬ評釋や議論文のやうなものは書くけれども、十年一日の如く俳句に止まつて、俳家顏をして居る次第である。是れは畢竟するに、俳句以外のことに趣味才能が乏しく、外のことを遣ることが出來ないからである。

そこで尙ほ趣味と云ふことに就て言ふと、從來俳諧趣味と云ふことが唱

へられて居る。是れも實に漠然たることで、具體的には十分に云ひ難い。凡ての文學の中で、或る傾きを持つて居ると云ふ位の名稱で、その極端のものとなれば、他と區別を明かに立てることが出來るが、だん〳〵相近づくに從つては、劃然とした區別を立てることは出來ない。されど此の俳諧趣味と云ふものは、主として俳句の十七字の詩形よりその傾きを生じて來るので、詩形が簡單ながら、その詩形で言ひおほせられ、その詩形に最も適當した長所を持つ可き或る趣味が自然的にそれへ寓したものである。又、誰れも知る如く、世界の文學に於て三十一文字の和歌と云ふものが、實に他に類のない短い詩形である。ところが俳句は尙ほそれよりも短い詩形であるから、その詩形に適つた趣味は、世界の他の國に於て、多く解せられて居ない。故に俳諧趣味と云ふのは、我が國に特有の趣味と誇つても

好いやうになつて居る。勿論、此の趣味は、支那の古代にも現はれて居て、日本にもだん〳〵と傳はつて居るが、今日の俳句の如く、著しく發揮されたことは古今未だ曾つてないと云つて好い。是れが芭蕉以來二百年此の方の現象である。だから是れまで俳句を弄んだ者が、前に云つた如く、その嗜好才能に依つて、他の文學に手を出すに至つても、矢張り弄び慣れ、そして能く解した趣味であるからして、自然に俳諧趣味が、他の文學の上にも現はれて、是れが又一種の特色を成して居る。現に俳句を遣つたことのある人の手に成つた寫生文なり、小說なりは、それ以外の人に見ることの出來ぬ趣味の表現が、その觀察なり思想なり描寫なりに於て存して居ることが、一目して分からう。

で、此の俳諧趣味と云ふものは、固より俳句のみに限つて現はれ得られ

ると云ふ趣味ではなく、他の文學にも十分現はれ得られる趣味である。單に俳諧趣味と云つても、之れを廣く解して云へば文學の或る一派の傾向と云つて好いのである。だから吾々の仲間が、小說を書くにしても、他の文學と違つて、低徊主義とか、何とか種々の名を以て世間からも呼ばれつゝある次第である。

然しながら俳諧趣味は、俳句の十七字の詩形に最も適當し、是れに由つて多く歌はるべきものであるから、此の詩形より脫却して、他の長い形式、數多の文字の使用することの出來る寫生文や小說を作ることになれば、何も此の趣味にのみ止ることはない。廣くそれ以外の趣味をも描寫することになるは自然の勢である。現に或る者の寫生文の如き小說の如き、それに現はれて居る趣味は、殆ど普通の叙事抒情で、俳諧趣味はどこにあるか見

出せないものもある。

尙ほ之れを譬へを以て言へば、俳句の詩形で俳諧趣味を歌ふと云ふことは、四疊半の數寄屋で抹茶を立てると同じことである。總てのことが簡易淡泊質朴である。ところが、二十疊、三十疊の座敷に於ける宴會となり、尙ほも百疊、二百疊の大會となれば、それ相應に裝飾もあれば、餘興もあり、その他酒肴も多量のものが出て、それに對する主客の動作も、四疊半の小さい所で茶事を遣る時の態度とはだん〳〵異つて來る。勿論、廣い座敷で多數の人々の宴會も、茶事見たやうに出來ぬことはない。さう云ふ風に遣ることもあらう。然し、多數となれば、多くは他の趣きに傾くことになる。是れから考へたならば、俳諧趣味の文學の上に於ける立場も、大抵分るだらうと思ふ。又、人間は何時も茶事ばかりをして淋しく樂むことは

出來ない、多數の人々と集つて大陽氣に音樂舞蹈と騷ぎ立て、美人相手にからかひ合ふこともある。それと同じく、俳句を遣る人々でも、その人に依つて其の他の文學にも行くのである。けれども、多數の宴會や、歌舞のまどゐの騷々しいことを好まぬ人は、年中靜かにして素朴な茶事のみを樂しんで居るのもある。俳句から他の文學に遷る人と、又、俳句のみに止つて居る人と、その間の消息は是れに依つても分ることである。

けれども、俳句と云ふものは、先にも云ふ如く、他に類のないくらゐ小さい詩形であるから、從つてその趣味も、他の趣味に比較して、比べものにならぬくらゐ小さく、將來他の文學と共に同じやうに生存し、發展して行くことは出來ぬと思ふ人もあるやうだが、決してさうでない。非常なる俗物は知らず、既に趣味を解する人なれば、多數の集る宴會の趣味も解す

ると同時に、又、茶事の簡易なる趣味も解する筈である。又、大會の濃厚な趣味に飽いた者は、時々茶事のやうな淡泊な趣味にも指を染むべき道理である。又、簡單なものゝ、複雜なものゝ、持ち得ない長所を持つて居る。從つて文學の範圍が益々擴張さるゝ曉は是非共此の如き特長ある俳句は、東洋の一隅より世界の全般に向つて認められ、且珍重されて行かねばならぬ筈である。

早い話が、從來西洋にはなかつた茶事が、向ふにだんだん入つて、庭園も出來、數寄屋も出來、今のところ追々流行の姿であると云ふことだ。それと同じく、俳句は次第に向ふへ歡迎される樣になるに違ひない。向ふの人々が日本語で俳句を歌ふこともあるだらう。又た、その國々の言葉に應じて簡單な詩形を創めて歌ふこともあるであらう。言葉は外國語でも、詩

形が詩形だから自然と俳諧趣味が現はれて來る。茶事は何所へ行つても茶事趣味であるが如く、俳諧趣味は何所へ行つても俳諧趣味である。尤も、日本以外の外國人は、淡泊たる性情に乏しいが、日本人は此の性情に富んで居て、之れが一面に發揮すると大和魂ともなり、武士道ともなるのである。從來の日本は、斯う云ふ國柄で居たから、俳句の如き淡泊なる詩形も出來たのである。されば將來如何樣になり行くとも、俳句及び之に伴ふ俳諧趣味は、日本がその本家として誇ることが出來るのである。

ところが、近來に至つて外國の優れた學術が澤山輸入せられて、其餘弊は物に長短あることを忘却し、何でも彼でも舶來でなければ可けぬと云ふところから、俳諧趣味が他の歐米諸國に多く見えない故を以て、一種の舊弊の如くに考へ、本來頭に感じのあつたものをも、打消し〳〵て、西洋の

文學趣味にのみ同化しようとする者もあるやうである。又、或る俳人中には、是れではならぬと思つて、我が俳諧趣味に改革を企て、務めて西洋の文學趣味に合はして行かうとする者もある。是れは如何にも不見識なことで、恰も四疊半の數寄屋の中へ、西洋の宴會の儀式を折衷しようとするやうなもので、誰れが考へて見ても不都合なことは知れ切つて居るが、世の中の風潮は妙なもので、それに躍起となつて贊成する人も隨分あるのは、甚だ困つたことだと思ふ。

美的文學の存在

諸所の新聞や雜誌の上に、自然主義に關して、種々の議論が數々出て居

るやうであるが、われの仕事が極く多忙なので、從つてそれ等の議論も熟讀する暇がない。こゝにはほんの又聞きをしたり、或る一事から推定した事に就いて、それを相手として我が美的文學の事をお話しよう。

一體、文學と云ふものが發達して自然主義となり、其自然主義が非常な勢力を得て、今日文壇の覇を握り、從來の文學は色を失つて、萎靡頽る振はず、文壇の邊隅に漸く其影を止めて居ると云ふ事が、われには大なる疑問である。

文學には定義が數あるであらう。自分には西洋の書物は讀めず、深い學問が無いから、能く知らぬが、自然主義は文學に如何なる定義があつて、今日文壇に覇を握つて居るのか、其理由を知るのに苦む、自分の知る範圍で人間に必要なる文學の定義とは、人間の美感を叙寫し、美感を引き起し、

美に同化せしめ美を弄んで自他を娯樂慰藉すると云ふのが目的である。

此の文學に依つて美感を引き起し、美と同化し、美を弄んで娯樂慰藉されると云ふことは、人間のあらん限り必要なことで、永久亡びるべきものでない。人間には衣食住の苦痛から、進んでは社會のあらゆる事業に從事する苦しみと云ふものがある。人間が此の世の中に生活して行かうとするには、然うした種々の苦勞があつて、絶えず精力をつかつて居る。其生活して行くと云ふ事の中に、それは樂みも慰めも幾らかはあるであらうが、先づ苦痛なことが比較的、生活の上に多く、其努力の爲めに多大の精力を消費すると云ふのは、動かすことの出來ぬ事實である。限りある人間の精力を以て、此の限りなき生活の努力に堪へると云ふことは中々の難事である。縱し堪へ得るとしても、必らず一面に疲勞を來す。のみならず人間に

は單に生活の努力のみではない、時とすると自己の事業に失敗し、又思はぬ難事に遭遇し、失望し落膽する事が多い、其時に於て人間は、煩悶し、懊惱し、痛切に苦痛を感ずる。それが極端になると、或は發狂するとか、自殺するとか云ふやうな、悲慘な事實となる、是れは特に自分が云ふまでもなく、新聞の三面記事を見れば、明らかに知ることが出來る。

その生活の努力、それに伴ふ疲勞を癒し、苦痛をまぎらす爲めに、人間はどうしても何等かの方法を以て氣を他に轉じ、自分の生活と直接利害得失の關係が一切ないものを弄んで、慰めを求め、疲勞を休め、そして、更に再び新らしい精力を養つて、生活に努力することは、人間の生きると云ふ上に於ける根本義である。

で、人間に衣食住の苦しみあり、生活の爲めに苦痛が絶えないとしたな

らば、どうしても、生活と云ふものゝ利害得失の關係を離れて、或るものに娯樂慰藉を求めると云ふ事は必要である。自分の生活と利害關係のある事では、決して眞の娯樂慰藉とはならぬ。例へば勝負事の如きは其一例である。で、生活と利害關係のないものに娯樂慰藉を求めるとすれば、此の美を弄ぶと云ふ事が、先づ第一の適當なことで、其中でも文學が最も適して居る。そして、人間が文學に依つて美を弄ぶと云ふことは、われ〳〵の先天的に持つて居る所の必然性であつて、人間の生存する限り此の美的文學は存在する。然し、昔の仙人とか云ふ者のやうに、山中に遁れて、妻子なく、生活なき人は此の限りでない。即ち、仙人に非ざる限りは、文學に依つて美を弄ぶ事は、最も必要であり、又、人間の本性でもある。

以上述べた所を以て、われは美を弄び、美を謳ひ、己の感ずる美に他を

同化せしめるのを以て文學の定義とする。然し此の定義を以て文學に非ず、今の自然主義の云ふ如く、美を弄ぶは文學の僞りであつて、眞を表はすを以て文學の定義と云ふなら、從來の文學はどうなるのであるか。それは滅びるとしても美に憧憬し、美を弄ぶと云ふ此の人間の必然性は如何にするか。之れをも曲げて、尙は文學を以て美を弄ぶを僞りなりと退けることは出來まい。

今の自然主義の文學を見ると、理想を去て現實に就き、專ら實感的情的に吾人を刺戟するやうだ。而して或る者は自然主義文學の然うした刺戟に依つて娯樂慰藉が出來るかも知らないが、又或る者は、人間生活に最も必要なる娯樂慰藉を受けるどころでなく、却つて自己も小說中の人となり、其爲め一層の苦痛煩悶を生ずる者もある。即ち自然主義文學にては、一般の

人々を慰め、樂ますと云ふ事が出來ない。若し慰めを求め得られるとしても、美的文學に依つて求むる慰安の如く、人間の利害を放れて——惡く言へば子供の如く、善く言へば、利害を超越して、慰められる安心な娯樂慰藉に非ずして、極めて危險なる娯樂慰藉である。

此の美を弄び、美を樂しんで、生活の苦痛を慰めると云ふのは、文學に限らず、音樂、繪畫などにもあるが、文學に依つて弄ぶ美は、音樂繪畫に依つて弄ぶ美よりも、一般的、普遍的であつて、何人も求めることを得、解することを得る娯樂慰藉である、

人間のあらん限り、美的文學が此の如く必要であるとしたなら、文學として自然主義が如何に弱を稱へようとも、其一方には必らず美的文學も存在せねばならぬ。同じ美的文學と云つても、西洋では人事に多く美を求めて

居る。美學の書など見ても、人事美と云ふ事が盛んに說いてあるやうだが、和漢、殊に日本では人事美も謳ふが、自然に美を求め、自然美を謳つた方が多い。人事美を謳ふにしても、傍觀的態度を以て、殆んど自然の如く謳ふ。斯うした例は、殆んど西洋にはない。あつても極めて稀れである。其所で、美的文學が、人間の煩悶逆境を慰さめる其用に供せらるゝと云ふ事を考へたなら、自然美、人事美、いづれを謳ふにしても傍觀的態度を以て謳つた方が娛樂慰藉の目的に適する筈である。

總て、美と云ふものには、利害得失の關係はないが、自然の如く美を謳ふ上には、より以上、其關係がなくなる。其所で、從來日本で謳ひ來つた美の謳ひ方は最も好い。人間の生活が複雜になりつゝある際には、殊に此の日本の美的文學を盛んにする必要がある。一方熾んに火の燃えて居る時

にはそれを鎭めるやうにすることが必要である。一方濃厚なる生活の半面には、淡泊と云ふことが必要である。斯くの如き必要上から、如何に自然主義文學が盛んになつても、美的文學は存在せねばならず、殊に日本流の美的文學を盛んならしめると云ふ事は必要である。日本人には祖先傳來より、西洋にはない、苦痛を慰め、煩悶を洗ふ文學があるにも關らず、何を苦しんでか他の物質文明の如く、文學までも西洋を模倣して自然主義のみに赴き、同じ美的文學でも西洋の人事美趣味にのみ赴き、日本の適當な文學を忘れんとしつゝあるのであらう。甚だ解し難いことゝ思ふ。我々は、言はゞ此の日本固有の文學と、西洋の文學を併せ弄び、西洋では二つを併せずして、其中の一に重きを置いて弄んで居た。其幸不幸は自づから明らかなる理である。その二つを併せ弄べる幸福を捨てゝ西洋趣味の一つに赴

くと云ふのは、誠に不幸の至りである。西洋でも次第に自然を謳ふことが盛んになつて來たと云ふことを聞くが、古來より此の特色を持つて居た日本では、却つて其一つに赴きつゝあるのは、誠に慨はしいことである。此の所を能く考へて貰ひたいものだ。

われは、敢て自然主義を非難するのではない。立派に自然主義と云ふものを存在せしめて置いて、他の一方の美的文學の存在の理由を明らかにしたのである。

俳句を難ずる者に

『文章百話』に『俳句と短歌』といふ説があつた。われにはそれに對して

少しく異つた意見があるから、一つそれを述べて見たいと思ふ。尤も始めの方の、短歌と俳句とを對照した上の區別長短等は、概ねわが意を得た所で、別段の異議もないが、終りの方の俳句に對する意見については、一應辯明して置かねばならぬ必要を認めるのである。

先づ第一に俳句即ち十七音の詩形を用ひて、これまで歌ひ來つた所よりも異つたことを歌つたらよからう。これまでの態度を改めて、現代の感情に觸れ且つそれに伴つて行くやうにしたらよからうと論者は言つてゐる。いかにも尤もである。大にさうなることをわれも亦贊成するが、併し、それと同時に、論者に對して異論を唱へねばならぬことがある。

そも〳〵人間の社會が進歩發達をすると共に、文藝もまた益々範圍が廣くなつて、さま〴〵の方面に渉り、さま〴〵の趣味を發揮して行かねばな

らぬ。又、行くことになるべき筈である。既往に於いて、文藝が狹い範圍に於て働いてゐたとすれば、社會の發達に從つてだん〳〵と廣まつて行くべき筈である。社會の側では、人間の活動の範圍がます〳〵廣まつて行くに拘らず、文藝そのものは狹まつて行くといふ筈はない。のみならず、人智が發達すると共に趣味はます〳〵多方面になり行くものであるから、論者が註文する如き方面に、この十七音の詩形を應用することにもとより異論はない。のみか、寧ろ十七音の詩形そのものゝ爲めにも最も願はしいことである。

併し、此くの如く押し擴める一方に、以前執つてゐた方面を打捨てゝ了ふといふことはどうであらうか。これまで開拓し來つたことは、ます〳〵研究し翫味して、その上に新しい方面を開拓してこそ、社會の發達と伴う

て文藝も廣がり行くことになれ、既往を捨てるならば少しも廣がることではなくて、或る場合には寧ろ狹まることにもなる。譬へば新しい田地を開拓するからといつて、古い田地を草の生ふるに任せて置いては、何にもなるまい。古いのも新いしのも同時に耕耘して行つてこそ收穫も增すのである。

論者は、俳人は既往の古い形に囚はれて、新しい方面を閑却してゐると難じてゐるが、論者の說く所は新しい方面に囚はれて、古い方面に働くを止めるものである。暴を以て暴に易ふ、其の非を知らずと言ふのがこの場合、この論者にわれの下したい言葉である。

で、わが說を以てすると、論者の說く、新しい趣味を開拓することは大に宜しい、盛んにおやりなさい。けれども、それと同時に、既往に開拓さ

れたものを打ち捨てるのはいけない。これはこれでもう研究して行かねばならぬといふのである。

或は新しい方面を主張する際に、古い方面を止めて了はねば、新しい方面が發達せぬといふかも知らぬが、それでは文藝が社會の嗜好に應じて行くのではなくて壓制的に文藝を變じて行くことになる。もしも既往の俳句が一般の嗜好に當らず、文學界に容れられぬならば、自然に消滅するであらう。殊更にそれを止めねば新趣味が發達せぬといふことはあるまい。なまじひにそれを捨て去つて了つては、却つて新趣味の由つて來る所を塞ぐことゝならうと思ふ。

更に一歩を進めていふと、俳趣味即ち人間界の外に立つて人間界を弄ぶといふやうな、即ち人間臭くない趣味といふものは、恐らく世界唯一のも

のであつて西洋人などは殆ど解し得ない趣味であらうと思ふ。一體西洋の文藝趣味は、歴史的に見ても、何處までも人間中心である。人間的の感情といふ以上に一歩も進み出て居らぬ。何を歌つても人間臭い。唯だそれがさまざまの形式を以て現はされて、その技術において、實に驚くべき成功をなして居るし、其の叙寫の巧みなること、其の思想の精微にして緻密なることは、とても東洋人などの及ぶべきものでない。で、これらの點は今後東洋人の大に學ぶべき所であるが、同時に又彼になくして我にある所の東洋特有の文藝趣味をも自覺せねばならぬ。

東洋趣味には人間中心のものも固より有るが、又人間と宇宙とを平等にした一種の趣味、人間以外の動植物、その他の森羅萬象をも平等視して歌ふ趣味をも有つてゐる。而して此の趣味は實に我にあつて彼にない所であ

るから、社會が發達して、文藝の範圍が廣くなれば、當然此等東西兩洋の趣味は、同時に存在して行かねばならぬ筈ではないか。よしんば文藝の技術が如何に精細でも、趣味にして一方に傾いて居る以上、それのみを存續せしむるは他の社會の發達と同じ徑路ではあるまい。西洋文藝の技術の巧妙なのに驚いて、何でも彼でも西洋でなければならぬと思ひ、わが世界特有の趣味を捨てゝ了はうとするのは、社會の發達に對して撞着したものであらう。

此の點より見ても、俳句即ち東洋趣味の下に立つてこれまで歌つて來たものを捨てることはならぬ。われはそれより東洋趣味西洋趣味を兩手の花として、すべての文藝を歌ひたい。左りの手の花を拋つて右の手だけにするのは、よしんばそれが良い花であつても、やつぱり片手に花で、知恵の

無い話である。偏屈なる考といはねばならぬ。

それに、人々の嗜好は其の面の異る如く、實に千差萬別である。又一人の趣味も年齢に從つて區別が出來る。或る性質の人はすべて新らしいことを好み、又直接に吐露して歌ふ文藝を好むが、他の性質の者は古き所を懷しく思ひ、心を他の方面に轉じて、暫くなりとも人間界を忘れて見たいと云ふものもある。又、人間一代でいつても、少壯の時には何事も斬新にして熱情に向くが、年を取れば反對に昔を戀ひ慕ひ、淡泊なる趣味を好むやうになる。已に文藝にして人間の爲めに出來てゐるならば、一代のすべての需要に適して行かねばならぬ。單に或る人間や或る年齢のみに當て篏つたものを尊重し、その以外のものは無くてよいといふのは不公平極まることである。

われは既に六十二歳で年も取つてゐる。若い時も年老いた時もすべて經驗してゐる。それに多くの人にも接してゐるから、自然に人の嗜好の變遷も知つてゐるし、人に依つて嗜好の異ること、東西兩洋國々でさまざまに趣味を異にしてゐることなども知つてゐるから文藝の趣味もなるべく廣く歌はれることを希望する。

なほ一歩を進めていへば、これまでの俳句趣味、押し廣めていへば東洋趣味は、今後西洋人にも大に學ばしめたいと思ふ。この趣味は一面淡泊洒脫にして、公平無私といふことにもなつて、その結果は宇宙をすべて平等視する位であるから、人間はもとより平等視する。即ち日本人は西洋人に對しても、文藝は勿論社會の萬事を交通して、公平無私の態度を取るが、西洋人はこれに反して、人間の固執心執着心が深く、色の違ひに依つて一方

を敵視したり、日本人の發達を恐れ憎んだり、とても日本人が西洋人を見る如く公平無私でない。

勿論各立場を守る必要があるから、淡泊一邊で能事終る譯ではないが、併し西洋人には今少し淡泊洒脫な公平無私な態度を取らせたい。それには東洋趣味殊には俳句の既往の趣味を知らしめたいと思ふ。十七字音の淡泊な詩形が、西洋に發達せずして、わが國にのみ發達したのは、畢竟國民性の相違から由來したものであらう。

この點より俳趣味は又一面に大和魂となつて發揮される。死を見る歸するが如きも、國の爲めには命を鴻毛の輕きに比するも、すべてこの淡泊なる性情の發現であつて、昨日の敵は忽ち今日の味方となつて手を握るなども日本の國民のみである。すべて淡泊なればこそ新しき智識を好む譯にも

なるので、近々五十年間に古今東西に比無き發達をしたのも此の爲めである。西洋人なら恐らく數百年かゝるだらう。して見れば、大和魂そのものも俳句趣味が多くの部分を占めてゐるといつてよからう。旁々以て既往の俳句趣味は價値があること疑ひない。それだのに、此の點を止めて、他に向へといふのは、われが論者に同意することが出來ない。われが論者に反對するのは實に文藝趣味の爲めに反對するのである。

又、俳人は先輩崇拜をするといはれてゐるが、これは事實を調べて上のことか、今日舊派といふ人々は、芭蕉を神のごとく尊むし、且つ其の派其の派の先輩を尊んでゐるが、それが當を得ぬといふ所より我々の俳人仲間は出來たのである。子規などは芭蕉をも隨分輕んじて論じてもゐるし、その他眼中古人なしといふ概があつた。寧ろ我々俳人は先輩を崇拜せぬのが

缺點であるまいかと恐れる位である。尤も蕪村は子規も大に推稱したが、これ以て蕪村その人を崇拜したのではない。蕪村の作品が天才的で、とても及ぶべからざる點のあるのを嘆美して、其の價値を說いたのである。その他價値ある句を價値ありとして取つてゐることは、子規を始め我々とても同じことで、他の文學者が東西洋を通じて或る價値ある文學の作品を賞贊すると何の異る所もあい。價値あるものを價値ありといふのが何の崇拜ぞ。崇拜の事實が何處にあるか。今一度よく觀察して貰ひたいものである。

戀に關する難點についても一寸辯じて置かう。戀が人間の感情の重なるものであつて、それを文藝上に述べるといふことはもとより異存はない。併し詩形の異るにつれて、その戀の述べ方が自然に異るといふことを會得して貰ひたい。戀は本來一寸簡單なるもので述べるよりは、長く反覆して

述べるに適したものだ。されば小説とか、詩でも長い形式をもつたものは、それをよく述べてゐるが、十七音詩形のごときものは、これを受け容れるに不適當であるから、自然に他の文學の如く歌つてゐない。即ち十七音詩形の本分を知つて此くの如くになつたのである。されば、たま〳〵歌つてある戀も、十七音詩形に適した淡泊洒脫なるものを撰んでゐる。和歌の如きは聊か詩形が長いから、少しく濃厚に渉つて歌ふことが出來るので、從つて戀歌も多い。

のみならず、戀の趣味と雖、單に熱したことのみを歌ふのが其の全體ではなからう。或は戀を洒脫にも說き可笑しく說くも亦一種の方面である。俳句の歌へる戀に不滿足なといふのは、寧ろ論者が戀の方面に渉つて廣くないとも思はれる。論者は熱した戀のみを知つて淡泊な可笑しい戀を知ら

ぬのであらう。われは俳句の說く所の戀を以て、もとより一小部分のものとは思ふが、この部分も添うて戀の全面は盡されるといひたい。

といつて、これまでの俳句が十七音詩形を十分に活用し能はなかつたので、今少し濃厚の方面をも歌はねばならぬといふなら、いかにも宜しい。それが果して出來得るものなら論者は勿論、その技能のある人は大に歌はれるがよい。併しそれと同時に、今までの方面を止めろといふには及ぶまい。

要するに、論者は熱心の餘り、一方に偏する弊があるやうだ。此處は大に御忠告して置きたいと思ふ點である。

現今の小説に現はれたる男女

婦人の話をするには矢張男子を相手にせねば御話が出來ない。一體女性は柔かなもので、男性は剛なるもの、女性は弱いもので、男性は強いものである。是れは人間のみならず、他動物にも概ね見る所のもので、先天的に定められたものである。併し男女共に人間であるからは又或一面に於て共通のものもある。其の共通の點を説明すれば、數々あるが、今は主としてその區別ある點をお話しよう。

前述の如く、男女には外形に區別あるやうに、心理的にも亦區別がある。女性は感情の溫かい愛と云ふ點が其の長ずる所、其の弊としては、物事に判斷が立たないで、感情に流るゝ傾向がある。是れに反して、男子は理性

の力強く、或る場合には殆ど冷い位、其の代り如何なる苦痛も忍耐して己れの立場を守ると云ふ事になつてゐる。かくの如き相違ある男女が互に助け合つて社會は都合よく組織され、生存して行くものと、われは信じて居る。

然るに現今の文學上に表はれた人物を觀ると、われの眼からは男女共同樣の性格に見える。勿論文學は感情を主としたものに相違ない。けれども人間多くの事實上から云ふと、只感情のみに動くものでない。男子はどこどこまでも自制自立の力強く、理性によつて感情を或る程度までに制し得べきものである。現今の小説に筆をとる人は、今少し男は男らしい、女は女らしい性格を書いたらどうか、私の見る所では、女は先づ女らしく描いてもあらうが、男を書くのにはいかにも剛健な所がない。女と等しく徒

らに情のみに流れ、忍耐力なく、戀に泣き、逆境に泣き、結局は女々しいざまの惡い叫びを以て描かれてゐる。こんなものを書いては男女性の區別を見分ける事が出來ない。

されど人の性格は定木のやうには出來ない。各自異つた性格をもつのであるから男子でも女子のやうな性格をもつものもあらう。是れが昔であつたら、女子のやうな男子は大いに耻かしめられ社會から擯斥せられたものである。然るに現今では女々しい情のみに流れた行爲をするも、左程社會の制裁を受けない。却つて文學的であるなどゝ讃美する傾向だから、現今の小説中にそんな女々しい男が生れ出るのであらうと思ふ。是れが文學上にのみ止まつて居るからよいやうなものゝ、此の弊が社會の事實になつたらどうする。この人間社會が生存し得ようか。此國家が獨立し得ようか。

若し他國と戰爭せねばならぬ時、兵役に從事する日本男子が、女々しく遁げ出すやうではどうする。此の日本國をどうする。一日も國民は安全に暮せない筈である。一國の生命財産を擧げて、弱者は强者の爲すに任し、奴隷となり婢妾とならねばならぬやうになる。女子は人の妻又は母となるべきであるから、これは情的天性を以て從順のみでもまあよい筈であるが、男子がかう女性的になつては、國家及び人間社會の勇々しき一大事である。

それだのに現今小説中の男子が、苦痛を叫び、煩悶を訴ふるを以て男子の能事終れりとする如きは、何たる事か。たとへ男女共通の點が或る程度まではあるにもせよ男女の本分は夫々異なつてゐる。男子は男子の本分、女子は女子の本分、是れは共に守るべきもので又守つて居るのが多くの場合の事實である。どうも今の小説に現はれる人物は、極めて稀な場合の男

性のやうに思はれる。

又婦人が男子のやうでもよくない。家事育兒が御留守になつては困る。尤も中には特種の者もある。恐れながら神功皇后や巴、板額など云ふ女性もあれば、又ジャンダークの如く一國の爲めに身を献じた奇女もある。併し之れを全體の女にあてる事は出來ない。一時的のものである。特種的のものである。女は女らしく婦人の本分を守らねばならぬ。と云つて何も昔のまゝの閨中に押込み主義で居れと云ふのではない。時代の需要に伴つた女性にならねばならぬ。婦人で、獨身や、家事育兒に餘暇ある者、又或る生活の事情ある者などは、相當の職をとつて社會に活動してもよからう。併しそれにも男女の區別はあつてほしい。ともすると男女同樣になる傾向がある。是れは今までの押込主義の反動でもあらうし、又は男子に餘り女々

しい者があるから、反對にその本分を代理するのであらう。然し男女共に一時的の變態は已めて、永遠に各自先天的の本分を盡して貰ひたいものだ。

男女兩性が只戀愛を滿足し合ふばかりを以て、夫婦の務だとは云はれぬ。子孫を永久に繁殖するのが夫婦の大なる務である。昔から男女は自然子孫を愛育し我が身を忘れて其の爲めを計つて居る。其の點から云ふと日本人は殊に感心なものである。西洋では夫婦の愛を本位とするから、子供には構はない。金持などは夫婦は遊んで歩いて、子供は乳母に預けつ放しにする。其以下の者でも子孫の泣くのを押入に入れて置いて、夫婦は手を携へて外出することが常だと云ふ。そんな風だから、その子供も成長して、親の恩を感ぜず、親が病氣になれば、遺產がほしさに看病すると云ふ無情な話、わが日本の如きはかゝる點は誠に少い。親子の關係は實に情が深い。

西洋では親子の關係に於ては、ある場合は、犬猿の親子にも劣つて居ると云ふ事を屢々聞く。此の劣つてる惡習慣までを日本人が眞似ようとする傾向が近頃出來かけた。何たるあさましい事であらう。勿論學術の如きは東洋より西洋が進歩してゐよう。が何でもかでも西洋ばかりよいとは云はれない。即ち親子の愛情の如きは夫だ。尙ほ總ての生物を見渡すに、元々同種族の繼續繁殖の爲めに、雌雄牝牡と云ふものは出來て居るものと思はれる。夫れに高等動物たる人間ともあらう者が子孫の事を次にして男女の戀のみに耽つては、本を忘れて末を追ふ譯ぢやないか。他の動物にも人間が却つて劣ることゝなる。戀を神聖だとか云ふけれども、子孫の愛はそれよりも神聖でなければ、生物たるの本義に適はぬ道理であるとわれは信ずる。尤も若い時は前後夢中に戀にのみ狂ふこともあらう。が、道理はどこまで

もこゝにあるとして精々注意するのと、せぬのとでは社會の上に現はれる結果に大いなる相違がある。而して此點は理性に強い男性が先づ考へて、情に弱い女性を矯正して行かねばならぬ。こゝに於て男女兩性の本分は愈愈發揮せなければならぬ譯ではないか。

藤野古白の最期

古白と同郷とは申すものゝ、われは同人の父の朋友であるから、其人となりや何やの事は、親戚ではあるし又年輩も左程違はない正岡(子規)の書いたものゝ方が能く解るであらう。正岡は古白が自分を以て競爭者として羨望し恨んだ樣なことを書いてあるが、一體子規と古白とは人物に相違が

ある。共に文學に心を寄せたものゝ、子規は能く理性と感情とが並行して其調和も得て、身體は虛弱であつたから、文學專門といふ風になつたが、若しさうでなく身體が丈夫であつたら、政治若くは事業といふ方面に手をだしたかも解らなかつた。之に反して古白の方は感情の最も烈しい質で、幼少の時抔は非常に癇癪を起した事も度々あつて、極く癇癖の强い子供で、所謂神經質の體格で神經は過敏も過敏、度を過して過敏であつた、だから研究といふとも假令するにしても自分の好む物のみに偏して、嫌なものは見向も爲ないといふ有樣であつた、所が子規は研究となれば何でも研究する。好き嫌ひの區別はなかつた。實に古白は天才肌の最も烈しいものと言つても宜からうと思ふ。彼の俳句にした所が子規は月並調を研究した揚句、新調を案出したが、之に就いて敎を受けた古白は直に天才の鋒先を現はし、

子規よりは早く新調の風を得て居つた。かういふ風であつたから――或は年齡の關係もあつたらうが、學問といふ上から言へば子規の方が勝つて居つて殊に漢學の點に於ては非常に上達して居つた。併し先天的の能力は古白の方が餘計に富んで居た。

かういふ風の天才肌の古白が今の早稻田大學、其頃の東京專門學校に入學して、研究學習の態度を取るに至つたのは不思議に思はれて人の怪むところであるが、恐らくは此うではあるまいかと思へる點がある。それは古白が戀ひ慕つた婦人があつた。併し未だ年は若し一家を持つといふ身分に達しては居らず、到底其の戀を遂ぐべくもなかつたので、私立とはいひながら官立に比して遜色なき學校の卒業證書でも握つたら其の希望が達せられるだらうといふのであつたらうと思はれる。

そこで專門學校に入學したが、一體古白の希望は大文學者かさもなくば大哲學者であつたから、無論文學科に入學した。所が天才のあつた爲か理想は非常に高く或は空想までに走る風があつて、頭腦の裡は非常に發達せるに拘らず、手腕はこれに伴はず、常に煩惱に煩惱を重ねて居つて、一體作物の如き書けば書く程進歩するものであるのに、常に考へて居るのみで容易に手を下さず、空しく頭腦ばかりを惱まして居たが、之が學校卒業の時は一層烈しくなつて、卒業論文の如き普通のものを書けば宜いのに、何か大哲理——古人未發の大眞理を現はさんとして、空想に耽つて居つて書くことは出來ず、唯焦り焦つて苦しむ許りで遂に精神に異狀を來す樣になつた。否、一體何うするのかうするのと人に向つて言つて語つた事なく唯自分の腦裡に思ひ込んで居る古白が、此時許は大論文を書くとか、一大眞

理を發表するとか口外したのを見れば既に此時精神に異狀を呈して居つたのではないかと思はれる。

精神に異狀を來したから一と先づ郷里に歸つて療養することになつた。此の歸郷中恢復執筆したのであらう、『人柱築島由來』といふ脚本を書いたので、再び上京した時、之を敎を受けた坪内博士の許に出して、其の主宰の『早稲田文學』に掲載さるゝことになつた。

この脚本を出した後自殺を遂げたのだが、此れは此脚本が世間に傑作と認められなかつた爲に其れを苦に病んで憤つた爲であるといふよりも、其脚本の主人公が己の理想通りのことを爲し遂げて自殺したのは、古白自ら其主人公に擬してあつて、自ら此脚本を公にするを得たのを以て、自殺をしたのではなからうかと思ふ。即ち此脚本は古白自殺の理由を示して居

るのではないかと思ふ。

で、眞の自殺の理由は解らないが、古白の再び上京した時は以前とは樣子が變つて、至つて沈鬱の風であつた、而して非常に厭世の姿で、われの家に參つて、近頃此浮世が嫌になつて死にたい、併し自分が歿くなつた曉、父母の嘆も思ひやられるし又弟妹などの行末も心配でならぬ。此二つの思想が常に鬪ひ居つて煩悶して居るなどといつて居たが、厭世の念慮は餘程强かつたと見え、死を欲するの念の方が打勝たと見えて、自殺を遂げて仕舞つたのである。

一體藤野家の家族は複雜であつて、古白が前の在京中は家族盡く一家中に住んで居たが、二度目の時は其一部——義理ある祖母叔母と共に居つたのである。其の自殺する前より、精神が狂つてゐた樣子であつたから、及

物兇器の類は一切側に置かない樣にして置いたのだが、或日友人を訪ねて其家に宿泊して、人々の寢靜まるのを待つて搜り出したのであらう。窃に短銃を懷にして歸宅した。歸つて家人の隙を伺ひ、短銃を出して、頭の頂上より彈丸を腦中に打込まうとしたが、これは外れて、彈丸は後頭の皮膚を掠つて襟の上部に留まつた、そこで、再び裝藥して（此の短銃は連發銃では無かつた）筒口を前額に當てゝ打つた。此の度は彈丸は前額の處に三分の一、殘の三分の二は視神經床の處に入つた。家族は其物音を聞き付けて慌てゝ其室に行つたが早や人事不省の狀態で頻に悶いて居つて、醫師の所に人を出す、われの處に使を寄越すといふ樣な事でわれの行つた時は早や醫師が來て繃帶を施して居る時であつた、それから大學の病院に送つて行つたが、腦の右半分に傷ついたと見え、左手を擧げて前額に當てようと

したり、頻に左より右に向て身體を轉がし、非常に苦悶して、遂に永眠することになつた。此時古白は湯島に、われは眞砂町に居つた。

古白の自殺した時のことは此んな事で、死なうと思つて直に死んだのでなく、短銃の事でも解るが、餘程以前より覺悟したので、遺書も七八通、事細かに認めてあつた。これを見ると、殊に弟妹の事を氣にして居つたのが解る。

一體藤野家は士族としては有福の方で別に生活に差支へるといふとはなかつたが、何ういふものか弟妹のことを心配して居た。尤も母は繼母であつたが、世間の所謂繼母とは違つて、至つて家族間は平和で、殊に古白が一度精神病に罹つた以來は、本復した後も及ぶだけ本人の氣に逆らはぬ樣に家族盡く努めて居たから、一家の事情より自殺するといふとはありよ

う筈なく、全く自分の抱負は大きく理想は高尚に過ぎて、假令之れを遂げ之に達するには順序方法はあつても、それが天才肌の男であつたから、直に之に到れるものと思つて、行はうとしても手腕は之れに伴はなかつたので、煩悶に煩悶を重ねて居る上に、曩に自分の戀ひ慕つた婦人は再度上京した時は、既に婚嫁して、最早其戀をも斷念しなければならない事になり、自分の抱負理想に對する煩悶に失戀といふことが加つて、愍むべき死を遂げるに到つたのだらうと思ふ。先に申した『人柱築島由來』を坪内博士が公けにせられたのも、博士は同人に望を置かれて、之れでも公けに爲てやつたら、本人の氣も鎮靜して、行く〳〵は有望の作家になられるだらうと思つて、種々世話を盡されたのだが、其の甲斐もなく遂に自ら此世を去る樣なことをしたのであつた。

鳴雪 俳話と評釋 終

明治四十二年十一月廿四日印刷
明治四十二年十一月廿五日發行

〔鳴雪俳話と評釋〕一
定價金參拾八錢

著者 内藤鳴雪

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 市川七作

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二四〇番 博文館

内藤鳴雪君著

鳴雪俳話

全一冊洋裝四六判 紙數二百四十六頁 正價金貳拾八錢 郵稅金六錢

好評三版
卷頭著者肖像
其他寫眞版四頁挿入

本書内容

俳句と散文
芭蕉の句と蕪村の句
新年の句
梅の句
時鳥の句
五月の句
暑さと涼しさ
着想のさまざまの滑稽の句
名月の句
小春の句
汚ない句
月並の句と月並の意義
女子と俳句
山崎宗鑑の句
西山宗因の句
虚栗調の句
俳句を作る者に告ぐ
作句の要訣二三
選句談
正岡子規の人物
連俳と俳句との關係
俳句と川柳との區別
俳句と和歌と漢詩との關係
俳句の修辭に就いて

俳句作法

全一冊洋裝中判 正價金卅五錢
紙數三百頁 郵稅金六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金東京四〇番 博文館

角田竹冷君著

芭蕉句集講義

全四冊洋裝中判 卷頭寫眞版挿入 正價一冊金卅八錢 郵稅一冊金六錢

春の卷 夏の卷既刊 秋の卷 冬の卷近刊

俳壇空前の良書出たり之を芭蕉句集講義となす實に本書は蕉翁一代の俳句千餘句に對し一々通釋を與へて餘蘊なし荷も俳諧に志ある者乃至文學に趣味を有するもの之を座右に備へすして可ならんや

天生目社南翁著

芭蕉傳評

全一冊洋裝中判美本 紙數二百三十頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

趣味の向上を促し、擾々の俳壇を統一し、歿後二百餘年、尚兒童走卒に其名を知らるゝ芭蕉は詩人と稱せんよりは寧ろ偉人たり、著者は往事を追想して當時の社會狀態より彼が經歷、行動、性格及び日常生活に至る迄洽薄なる材料の下に縱横論評して偉人芭蕉を極む蓋し芭蕉傳の翹楚にして他に類なし

發兌元 東京本町 博文館

今井柏浦君

再版

古今 滑稽俳句集

花の春こんな親父ちやなかつたに　大江丸
錢湯に裸同士の御慶かな　鳴雪
鳴く猫に赤ン目をして手鞠哉　一茶
逃げまはる跛の聟や水祝ひ　子規
祖父の目に惚をほめけり風呂　乙二
おれとしてにらみくらする蛙哉　一茶
風呂敷へ落ちよつゝまむ舞雲雀　惟然
足と鍬三本洗ふ田打かな　也有

此等の句を讀んで感興を起さゞる人は讀むべからず此等の句を讀みて趣味を感ずる人は必ず讀むべし俳士といはず文人といはず凡上枕頭必ず此書なかるべからず

全一冊菊半截裝釘蕭洒紙數二百五十頁
正價 金參拾錢 郵稅六錢

再版

俳諧例句

新撰歲事記

どう言ふ時に歲事記が必要なるか
俳句の題を求むる時、其題が四季何れに屬するか分らぬ時
又其題が天文に屬するか地理に入るべきかの疑義ある時

全一冊袖珍携帶最便
正價 金七拾五錢 郵稅金八錢

俳諧書類

九版

明治一萬句

全一冊中判横綴裝幀雅麗
紙數四百四十頁
正價 金卅五錢 郵稅六錢

五版

新撰一萬句

全一冊中判横綴裝幀雅麗
紙數五百二十頁
正價 金四十五錢 郵稅六錢

再版

最新二萬句

全一冊中判横綴裝幀雅麗
紙數七百十四頁
正價 金七拾錢 郵稅八錢

▲又其名詞がわかつてゐても其意義形狀等のわからぬ時
▲又其題の文字がわかつて居ても其音訓の讀み方を知らぬ時
▲俳句を作るときに題の說明と古人の句を對照して參考とする時

此一卷さへあれば俳句は何んの苦もなく出來る

博文館發行